
インフィニット・ストラトス 黒き叡智

竜華零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

【Nコード】

N0293Z

【作者名】

竜華零

【あらすじ】

IS、それは宇宙開発を目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。現行兵器を遥かに凌駕する性能を持つそれは、瞬く間に世界を変革させた。

そしてそんな世界に生きる少女、名は「篠ノ乃 楓」。

IS開発者、篠ノ乃 束の実妹にして、IS操縦者養成所「IS学園」の女生徒、篠ノ乃 篝の双子の妹。好きなものは姉、将来の夢は宇宙進出、そんな女の子。篠ノ乃姉妹の末っ子、ただいま15歳。長姉、束によって黒き叡智を授けられた彼女は、はたしてこの世界

で何を見るのか？

この物語は、「インフィニット・ストラトス」を原作とするオリジナル主人公再構成モノです。苦手な方はご注意ください。原作準拠・非アンチが基本原則、でも原作の範囲を超えたらオリジナル展開になる可能性があります、ご注意ください。

*パロディ要素あり、そういった表現が苦手な方はご注意ください。

ブログ：「お姉ちゃんのお願い」（前書き）

はい、それでは・・・。

妹「はーじまーるよー」

・・・！？

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」

インフィニット・ストラトス、通称『IS』。

人間が宇宙に進出し、活動することを目的に開発されたマルチフォーム・スーツ。

核である「コア」とそれを守る装甲から成る、人類を次のステージへと押し上げることを可能とする鍵。

開発者の名は、篠ノ之 束。

しかし従来の機械を遥かに凌駕する性能を知った主要国は、これを宇宙開発では無く「兵器」として利用することを考える。

結果、『IS』は現行兵器を超える「機動兵器」として世界に認知されることになった。

しかしこの新たな「兵器」には、致命的な欠陥が2つ、存在した。1つは『IS』の起動に不可欠な「コア」の存在、これは世界に467個しか存在しない。

開発できる唯一の人間である篠ノ之 束がそれ以上の数を製作しないため、これにより『IS』の絶対数は467機と制限されることになった。

そしてもう1つ、むしろこちらの方が致命的かつ決定的な欠陥……。

『IS』は、女性にしか使用できない。

原因は不明、開発者である篠ノ之 束ですらわからないとされている。

しかし、いずれにせよ『IS』の絶対性と欠陥は、世界を変革した。誰が望んだ変革かは別として・・・そう。

世界は、変わったのだから。

・・・「誰か」のために、「誰か」によって。

Side しののの
篠ノ之 楓 かえで

某国・某地域・某秘密ラボ・某部屋 。

正確な位置を教えられなくてごめんなさい、でも一応、私は潜伏中なので。

誰にともなく謝りながら、私は空中投影のディスプレイ3枚と睨めつこ中。

2枚の空中投影型のキーボードに指を踊らせつつ、12畳四方くら

いある部屋の中央にある「モノ」に、時折視線を投げる。
そこは、ちよつと普通では無い部屋。

「・・・お？」

灰色の無機質な部屋には無数の大きな機材とケーブルの束があつて、
そこら中に小さなネジやボルトが散らばつてゐる。
そして今、私と目が合ったのは・・・機械仕掛けのリス。
ドングリのようにネジを齧る姿は、何だか可愛い。

束お姉ちゃんが作つたリスだけど、用途は良く知らない。
でも束お姉ちゃんが作つた物の中では比較的マトモな部類で、結構
好き。
だつて、可愛いし。

「何より、無害だし・・・無害なのは良いよね」

ここは、束お姉ちゃんの秘密ラボ。
場所は定期的に移動するから、何とも言えないけど・・・設備はた
ぶん、世界一。
かれこれ数年間、ここで束お姉ちゃんと「クーちゃん」さんと過
してゐる。

「・・・えーでーちゃんっ」

「・・・お？」

「かーえーでーちゃーんっ!!」

声が、した。

次いで、ドタドタドタ・・・と言う誰かが駆けて来る音。それに反応して、すぐに私は身構える。

過去の経験から、「あの人」は部屋のドアから突撃してくることはわかってる。

彼我の距離7メートルを物ともせず、まさに「飛びついて」来るのだ。

危ないからやめてって言うてるのに、全くもって聞いてくれない。だから、私の方がちゃんと対応してあげないと。

「だあーいニユースだよっ、楓ちゃんっ!!」

しかし、相手の方が上手だった。

何故なら相手は、ドアの方ばかりに気を取られていた私の虚をついて、上から来たから。

がばっ、と天井の一部を外して、上から飛び下りると言う形で。

むぎゅっ。

・・・人が潰される音をいくらコミカルに変換してみても、痛みは

変わらないと言うことがわかった。

何と言うか、押し潰された。

首と腰とか足とか、諸々の骨が軋んで

むしろ、何で折れ無か

ったんだろう 潰された。

成人女性が身体の上に落ちてくれば、それなりの音と衝撃が駆け抜けるわけで……。

「……お、お姉ちゃん……お姉ちゃんが全力で飛びつくと私の命が危ないと何度お願いしたら……」

「あつははは、楓ちゃんは今日もラブラリーだねっ、お姉ちゃんは嬉しいよっ」

息も絶え絶えな私の言葉を軽くスルーするこの人は、私のお姉ちゃん。

天井から落ちて来たのは、20代の女性。

腰まで伸び放題になった髪に、どこことなく「不思議の国のアリス」を思わせる青色のワンピース。

頭には何かの機械らしいウサミミカチューシャ、眠そうな目を目一杯笑みの形に歪めて、私を抱き潰そうとしている。

名前は、篠ノ之 束。たばね

私の実の姉で、『IS』を開発した本物の「天才」。

「天才」の名に恥じず……と言うか「天才」という言葉がバカらしくなるくらいの「天才」なのだけど、何だろう、身内かそくに対する距離感がゼロ距離な人……。

「ねえねえねえ、楓ちゃん楓ちゃん、大ニユースだよ大ニユース、もう大ニユース過ぎてお姉ちゃんは楓ちゃんに抱きつかざるを得なかったよー」

「・・・それは良いから、離してお姉ちゃん・・・」

「実はねえ、いっくんがね　あ、いっくんは知ってるよね？」

知ってるに決まってるよね、楓ちゃんだもんね　うん、いっくんがねえ、どーんっ、何と『IS』を動かしちゃいました、ぱふぱふ」

そして、人の話を聞いてくれない。

でも、まるで緊張感も何も無いような人だけど、絶賛世捨て人中。先程も言ったように、私・・・と言うか東お姉ちゃんは世間的に言うところ、失踪中だから。

どうして世間から身を隠そうとしたのかとか、それは良く知らない。でも数年前のある日、何を思い立ったのか失踪した。

でも『IS』開発者である東お姉ちゃんの失踪は、他の人にとっては無視できない大事件。

何しろ、『IS』のコアを作れる唯一の人物の居場所を把握できないわけだから。

まあ、東お姉ちゃんがどう感じているかは、わからないけど。

そしてどう言うわけか、東お姉ちゃんはある日、私も一緒に連れ出した。

・・・何で私まで連れ出したのか、東お姉ちゃんはさっぱり教えてくれないけど。

「いっくん・・・ああ、一夏さんですか、篝姉さんの幼馴染

の」

「ほうね 箒姉さんは、日本にいる私の双子の姉。
おりむらいちか 織斑一夏さんは、その箒姉さんの小さい頃のお友達。」

私も、何度か会った覚えがある。」

私は小さい頃は身体が弱くて、ずっと家にいたから……。
……だから同年代で会った子は少なくて、良く覚えてる。
……あれ、でも一夏さんって。」

「……男の子、だよな？」

「うんうんっ、不思議だよなっ、ISは女の子専用なのにねえ」
「それは……うん、本当にびっくりだね……」

東お姉ちゃんの作った『IS』は、男性には使えない。

と言うか、唯一にして最大と言っても良い欠陥で……。なのに、男性の一夏さんが動かした。

東お姉ちゃんですえ、驚いている……。みたい。

いつもニコニコしてるから、何を考えているかはわからないけど。」

「本当はお姉ちゃんが行きたいんだけど、でもでも、お姉ちゃんにはやる事が一杯なのでした〜！」

「はあ……。」

「と言うわけで、そこで登場お姉ちゃんのエンジェルっ、楓ちゃんに見て来て貰おうと思いまーすっ」

「はあ？」

ダメだ、脈絡が無さ過ぎてダメだ。

でもお姉ちゃんの笑顔は、花のエフェクトを飛ばしながら全力全開状態。

こうなると、私は嫌と言えないわけで……。

「いつくんはねえ、何だかどうでも良い連中が勝手にちーちゃんと篝ちゃんのいる所に放りこんじゃったみたいなんだよねえ」

「ちーちゃ……千冬姉様と、篝姉さん？」

千冬^{ちふゆ}姉様は、東お姉ちゃんの親友、ついでに言えば一夏さんのお姉さん。

その人と篝姉さんがいる所……って、まさか、「あそこ」！？

「む、無理無理無理っ！ 東お姉ちゃんと一緒に失踪してた私が突然現れて良い場所じゃ無いでしょ！？」

「んん……のーぷろぶれむっ！」

「そんなバカな！？」

親指を上にも拳を握り込んでウィンク、そんな東お姉ちゃんに私は悲鳴を上げる。

『IS』のコアを作れる東お姉ちゃん……にくつついて失踪してた私が、突然ひよっこり「あそこ」に出現したらどうなるか……考えただけで恐ろしい、と言っかリアルに怖い！

突然黒服に囲まれて拉致とかされたら、何とするっ!?

「あっはははは、楓ちゃんは心配性だねえ」

「いやいやいや、そう言う問題じゃ・・・」

「だーいじょーぶっ、これまでお姉ちゃんが大丈夫って言って大丈夫じゃ無かったことがあるかなあ?」

ある。

例えば、今。

「むう、楓ちゃんお願いっ、お姉ちゃんのお願いを聞いてほしいなあ」

顔の前で手を重ねて「お願い」ポーズ、うう・・・そ、そんな風にされると。

ああっ、そんなウルウルした眼差しで見つめられたらあ・・・! う、うう・・・。

「しょ、しょうが無いな、今回だけだよ・・・?」

「ほんと? ありがとう、楓ちゃん大好きっ!!」

「ろ、了解ロケ・・・」

結局、私が折れて・・・むぎゅっつと、東お姉ちゃんに強く抱き締められる。

豊かな胸に顔を埋められて凄く苦しいけど、でも私は引き剥がさない。

むしろこっさり、お姉ちゃんの背中に手を回してみたりして。

はあ、私ってどうして東お姉ちゃんに甘いのかなあ……。
でも、お姉ちゃんってポカポカだね。

「あ、ちなみに筆記試験って言うのが明日あるんだって。会場はイスタンブール」

「な、何でイスタンブール……？」

「あみだくじー」

「え、ええええ……。？」

はあ……。東お姉ちゃんから離れて、私は傍の『IS』の黒い装甲に触れた。

何か、物凄く不安だけど……。でも、お姉ちゃんが大丈夫って言うてるし。

それに、箒姉さんにも久しぶりに会えるし……。

何より……。『学校』に、行けるんだ。

……。それじゃ、行こうか、『黒叢』
いつか、お姉ちゃん達と宇宙を飛ぶために。

プロローグ：「お姉ちゃんのお願い」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、ではここでは「IS」についての説明をしますね！。

お姉ちゃんの方がよく知ってるんですけど、説明とかしない人なので。

えーと・・・。

アイエス

IS：

正式名称「インフィニット・ストラトス」。宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。まあ、ちょっと大きな機械仕掛けの鎧みたいな物だと思って頂ければ・・・黄金聖 みたいな物です。

開発当初は認められませんでした。ある事件以降、世界にその性能が認められます。はい、でも宇宙開発には使用されずに軍事転用されました。現在では核兵器に替わる「抑止兵器」とも呼ばれますね、数は500もありませんけど。

国際条約で、各国のIS保有台数は厳格に定められています。

ISはコアと腕や脚など装甲から形成されています。シールドエネルギーギアによるバリアーや「絶対防御」などによって現行兵器（核兵器含む）ではISに乗ったパイロットを倒すことはできません、チートです、流石は東お姉ちゃんです。なお、物質の量子化と言うトンデモ機能もついています。

最大の特徴は「自己進化」。経験を積むとISのコアは学習して成長します。成長するとより性能が上がります、まるで人間みたいですよね。

篠ノ之 楓：

・・・はい、この世界で一般に知られているISの情報を説明しました。

もちろん、これで全てではありませんので、後は本編での説明をお待ちください・・・っと。

ふう・・・疲れた。

飴食べよ・・・って、あれ、ドロップ缶が空っぽ？

篠ノ之 束：

あつはつはつ、中身はお姉ちゃんがぜえんぶ頂いたよ！

楓ちゃんの説明が長かったからね！

篠ノ之 楓：

え、えええええ・・・。

主人公設定（物語スタート時点）（前書き）

お久しぶり、あるいは初めまして。

この度「IS」に参入致しました、竜華零です。

最近読み始めた作品ですが、頑張って完結まで持つて行きたいと思っています。

まずは本編を投稿する前に、主人公設定を公開。

今後、増えて行く可能性がありますのでご注意ください。
では、どうぞ。

主人公設定（物語スタート時点）

主人公設定（物語スタート時点）

氏名：篠ノ之 楓（しののの かえで）

誕生日：7月7日 年齢：15歳

身長：156cm 体重：43kg

スリーサイズ：B74/W56/H80

髪の色：黒 瞳の色：黒

特技：

束お姉ちゃんの暇潰しに付き合うこと。

パソコン関係（ハッキング、プログラミング、タイピング等）。

IS関係（整備・設計・解析・改良等・・・勿論、実姉の束の足下にも及ばないが）。

好きなもの：

パソコン関係、読書、機械（特にIS）弄り、飴（オレンジ味）。

苦手なもの：

「劣化束（あるいはそれに類する呼称）」と言われること、言われ
たらキレます。

激しい運動（幼少時に身体が弱かったことが原因）。

略歴：

肩先まで伸びた黒髪に黒い瞳、白い肌の少女、日本人形のように例
えられることもある容姿。顔立ちは双子の姉である箒にそっくり、
ただし箒よりも柔らかい印象。

篠ノ之家の3女にして末娘、束の実妹にして箒の双子の妹。実家は
剣道場でもある篠ノ之神社、ただ幼少時から身体が弱かったため、
双子の姉である箒と違って剣道は習わなかった。現在ではそれほど

身体は弱くないが、それでも激しい運動は苦手。あまり学校に行けなかったので、学校生活に淡い期待あり。

IS開発者である実姉、束が世間から身を隠す（つまり失踪）する際、その姉によって拉致・誘拐される（おそらく、IS開発直後の重要人物保護プログラムから守るためと思われる）。この際、束は篁も連れて行くつもりだったらしいが、結果として楓のみが束についていくことになる。

その後、束と共に逃亡生活・研究生生活を送ることに。そして15歳になったある日、束がいつものように持ってきた「お願い」が、彼女に新しい扉を開かせることになる・・・。

人物：

2人の姉が大好き、2人の「お願い」を聞くのが自分の生きがいだと思っっている。

2人の姉はそれぞれが別分野で才能を開花させている（束はIS、篁は剣道など）が、身体が弱かった頃から活動的な2人の姉が憧れだった。そのためいずれの姉にも自分は劣ると考えており、ある種のコンプレックスを抱いている。特に双子でありながら身体も丈夫で強い篁に対しては、幼少時から強い憧れにも似た感情を抱いていた。だが身体的スタイルについては、神の不公平さを呪っている。たまにカッコついで姉の頼みごとに「了解」と返すが、これは幼い頃に読んだ小説の影響だとか。別に本人はミリタリーが趣味なわけでは無い。

将来の夢は「姉妹で宇宙を飛ぶこと」。

束の「ISは宇宙開発のため」という言葉を、本気で信じてる。だから軍事に使ってる今の世界には少し不満があるらしい。

他者との関係性（束に拉致される前の時点）：

対織斑 一夏・・・

実は直接の面識があまり無い、何せ幼少時はほぼ布団の中。とは言え、何度かは顔を合わせたことはある。それと姉の箒が仲良くしていることや、束の親友の弟であることは知っている。個人的には、一応「お友達」カテゴリー！。

対織斑 千冬・・・

長姉である束により、嫌と言うほど話を聞いた。引き合わせてもらったこともあり、回数で言えば弟の一夏よりも多い。束に連れ出されていた間も束から（過剰に）話を聞いていたので、「凄い人」と認識。個人的には、束の唯一の抑止力として尊敬している。

対篠ノ之 束・・・

上の姉、楓の全ての基となった相手。まったく同じでは無いが一夏にとつての千冬が、楓にとつての束。大好きだが苦手、尊敬しているが何を考えているのかわからなくて怖い。連れ出されている間は、束によつて手ずからIS関係のスキルを学んだ。最も、教え方も宇宙的だったが・・・。

対篠ノ之 箒・・・

下の姉、身体が弱かった幼少時には憧れの的。箒のようになりたいと願っていたし、箒も運動のできない妹の分も・・・と思っていた節がある。楓が束に連れ出されてからも、ちよくちよく連絡はとっていた。でも何だか、少し距離感が・・・。

IS（専用機）：「黒叡」^{こくえい}（楓が把握している範囲内）

国籍：無 所属：無（名目上は篠ノ乃 束の個人所有）

*現在、国際IS委員会で対応を協議中。

楓の専用機、楓が束に連れられていた3年間で束から盗ん…学んだ技術を活用して基本設計した機体。そのため楓は「私の子供！」と呼んで可愛がっている。実姉、束のラボで製造、コアは束の個人所有の物を縁故で譲渡された（束曰く、妹へのプレゼント）。製造の過程で束からいろいろと調整を受け、世代としては第3世代相当の性能を持つ。

設計コンセプトは「ISを助けるためのIS（by 楓）」、しかし束は「ISを制するISだよん」と言っているらしい。束が第4世代型の開発の直前に製造したいわば「過渡期」の機体と言う側面も持つ。なお、束の「少し手伝う」の範囲がおかしいため、楓も把握していない機能がある可能性が高い。

機体色は黒、全体的に流線型で、肩先、腰部などが丸みを帯びたデザインになっている。スラスタは腰部の後ろについている2基、それと背中にも2基のタンクがあるが、これはナノマシン格納庫になっている（用途については下記参照）。

待機形態は菱形の黒い指輪、楓は普段左手の中指に嵌めている。

ISの装備：（IS学園に提出するスペック・データより抜粋）

「黒叢」の初期装備は2種類しか無い、と言うのも元々ISを補助・コントロールするために設計した「非戦闘用」のISだからである。そのため、楓本人は「お手伝いIS」と呼称。

「黒翼」：

単純に言ってソードビット、機体腰部に6基装備されている特殊な複合素材製の短剣型ビット。それぞれが固有のスラスタを持っており、自立した行動が可能。制御は原則として全自動、攻撃では無

く防御が主目的であり、至近距離での直接的な脅威からIS搭乗者を守るための兵装。また、全ビットを円環状に配置することで限定範囲にシールドを展開することもできる。ただしシールドは一方方向に一つしか展開できず、自動なため機械的な動きにならざるを得ない。

「黒叢」：

機体名の由来となったシステム。

書類上は自機以外のISの機体内にナノマシンを侵入させ、エネルギー供給の効率化などを行う仕様。

製作者は東、コアの開発者である東だからこそ可能にした新世代装備と言える。

使用時は「黒叢」の背中部分に搭載されたタンクの中に貯蔵されているナノマシンを、周辺に散布する。この際、散布したナノマシンの群れが影が広がるように見えることから、「黒叢」の名が付けられた。

*装備についてのさらに詳しい設定は、本編で少しずつ紹介する予定。

主人公設定（物語スタート時点）（後書き）

IS 装備元ネタ：

黒翼・・・ソードビット（ガンダム00）

黒叡・・・名前と待機状態（伝説の勇者の伝説）

今後も、パロディ装備が出るかもしれません。

その度、元ネタを公開していく予定です。

篠ノ乃 楓：

初めまして、楓です（ぺこり）。

えーと、好きなものは姉です、あとISです。

これから頑張ります、よろしくお願いします。

基本目的、束お姉ちゃんの暇潰しです。

・・・あれ、何か違う気がする。

えー、今後、ここ後書きでは作中登場のISとかの説明をしたりする予定です。

では、また本編で会いましょう。

・・・束お姉ちゃん、髪を三つ編みにするのやめて。

篠ノ乃 束：

ええええ~~~~???

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（前書き）

前書き、妹語録コーナー。

妹「ねえお兄ちゃん、私、お兄ちゃんとパパ、どっちのお嫁さんになるの？」

その日、我が家で戦争が起きました。

最終的に母が「ソレスタルビ イング」のように武力介入、紛争は早期に終結致しました。

妹がまだ、小学生だった頃のお話です・・・。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」

S i d e

おりむらちふゆ
織斑千冬

・・・『IS学園』、それはIS操縦者育成のための特殊国立高等学校。
運営と資金提供は日本国、しかしそこで得た技術は世界に公開する義務がある。
学園内においては、いかなる国家も介入できないことに表向きにはなっている。

IS技術独占国である　正確には、「だった」　日本、そしてここIS学園には世界中からISを、技術を、人材を求めて多くの生徒が入学してくる。
私の役目は、そんな連中を使えるように鍛えてやることだ。
一応、教師だからな。

「まあ、正直・・・どうかとも思うが」

コッ、コッ・・・そのIS学園の敷地内を歩きながら、私はそう声に出す。

だがその声は誰にも届かない、と言つか、教師も生徒も入学式だからだ。

もちろん、私も先程までは入学式に出席していた、教員として。

本来ならそのまま担当する1年1組の教室に向かう所だが・・・実は1人、迎えに行かねばならない小娘がいる。ただの小娘なら捨てている所だが、ただの小娘では無いからそうもいかない。

「・・・束の奴・・・」

ここにはいない親友　　親友、か　　を罵りながら、私は思考を続ける。

ただでさえ今年は、「世界でISを使える唯一の男」と言う触れ込みで私の弟が入学してきているんだ。

1年1組、私が面倒を見る。

私のたった1人の弟、家族、織斑一夏。

それだけでも手がかかると言うのに、ここに来てまた1人、面倒な生徒が増える。

篠ノ之　楓、私の親友でIS開発者でもある束の妹。

妹と言うだけなら、すでに私のクラスには筈と言うもう1人の妹がいる。

問題は・・・今度の妹が、失踪中の束と行動を共にしていた可能性が高い、と言うことだ。

すでに政府の方からいろいろと言われている、私としても捨てておけない。

・・・個人的にも、だ。

「それを、メール1つで『よろしくサンキュー』だと？ 今度会ったら殺す」

もう数年間会っていない上に、殺しても死なないだろうが。

まあ、奴の考えていることなど私もわからん。

メールには詳細な・・・そう、不必要なまでに詳細な情報が添付されていたが。

『飴ちゃんあげたらついてっちゃう子だから、気を付けてあげてね』
」だとか、特にいらん。

後は何だ、方向音痴で都会に慣れて無いからどうなの・・・。

「がつ・・・学校

っ!」

・・・はあ。

顔を手で覆って、私は溜息を吐く。

一夏だけでも、大変だと言うのに・・・。

そんな私の目の前には、正門ゲートの前で奇声を上げる1人の女生徒。

せめて、次女はつねに似ていてくれればと願った私が馬鹿だった。

何年かぶりに再会した、束お姉ちゃんの親友。それは何と、IS学園の先生だった……。しかも、出会い頭に出席簿で頭を殴られた。かなり、痛かったとだけ明言しておく。

「あう……。私の脳が二つに割れるかと……。千冬姉様、酷い……」

「ほう、良かったな、これからは左右の脳で別のことが考えられるぞ……。後、学校では織斑先生と呼べ」

「学校……。そう、学校だ つ！！ ぶぐつ！？」

2 撃目、しかも今度は角で……。かなり痛い。軽く泣きそう、あ、涙が。

「私に、同じことを2度言わせる気が……。？」
「い、いえっ、大丈夫、静かにしマス！！」

びしっ、敬礼しもって元気よく返事。

何年かぶりに再会した千冬姉様は、子供の頃よりもずっと厳しい人になってた。

黒のスーツをビシッと着こなす、カッコ良い20代の女性。

名前は織斑千冬さん、東お姉ちゃんの親友さん。

子供の頃からの知り合い、今ではここ「IS学園」の先生・・・学園、「学校」。

そう、私は学校に来てるんだ・・・！

子供の頃は良くて保健室登校、東お姉ちゃんに拉・・・連れ出されてからは逃亡生活。

ちゃんと学校に通うのは、実はこれが初めて！

「もう、興奮するなって言うのが無理・・・！」

「・・・篠ノ之・・・？」

「す、すみませんデス！」

再び出席簿を掲げる千冬姉様に、私は頭をガードしながら返事をする。

あ、アレは・・・アレだけはどうかお許しを・・・！

・・・でも、学校に来て嬉しいのは本当。

校門で興奮して叫んじゃって、千冬姉様に叱られたけど。

東お姉ちゃんに教えて貰った自己紹介も覚えたし、きっと大丈夫だよな。

お友達とか、できるかなあ・・・。

「あ、あの、千・・・織斑先生、入学式に間に合わなくてごめんなさい・・・」

「それについては後で罰則を加える」

「あう・・・」

いや、だって束お姉ちゃんがいきなり言いだしたから準備が……。は、初登校でいきなり罰則……。あ、でも結構、憧れてたかも。学校の罰則って、伝説のアレかな、トイレ掃除1週間？

「……束は」

「はい？」

「束は、どうしてる？」

私が学校の罰則について考えていると、千冬姉様が束お姉ちゃんのことを聞いて来た。

やっぱり親友、お姉ちゃんのことになるのかな。

お姉ちゃんが言ってた通り、本当はとても優しい人なのかも。

「えっと、ここに私を送り出した後、移動したと思うので……。どこにいるかは。あ、でも凄く元気ですよ、千冬姉様のことも良くお話してくれました」

「ちっ」

何故か、舌打ちされた。

あ、あれ……。？

その後は、お喋りはせずに廊下を歩く。

でもこう言う学校に来ること自体が初めてに近い私は、周囲をキョ

口キヨ口と見回す。

だって、何もかもが新鮮で、珍しいんだもの！
今日からここが、私の学校！

・・・っと、興奮するとまた叱られる、落ち着かなきゃ。

「・・・新学期早々、騒がしいな」

「え？」

不意に、立ち止まる。

そこは、「1年1組」のプレートがかけられた教室の前。
中からは、複数の声が聞こえて・・・。

「・・・大丈夫か？」

扉に手をかけた所で、千冬姉様が私に声をかける。

相変わらず厳しそうな声だけど、気のせいで無ければさっきまでは
無かった柔らかさを感じる。

・・・東お姉ちゃんの、言ってた通りの人。

「はい、大丈夫です！」

ハッキリと答えると、少しだけ笑ってくれた気がする。

・・・初めての学校、初めてのクラス。

もちろん、凄く凄く緊張するけれど、でも。

それ以上に・・・楽しみ。

これから、どんな毎日を過ごすことになるんだろう。

「・・・では、入るぞ」

ガララツ・・・千冬姉様が、教室の扉を開ける。

見ててね、東お姉ちゃん。

楓は、お姉ちゃんのために頑張るよ・・・！

S i d e

織斑 一夏

あの日、女にしか動かせないはずの『IS』を動かした瞬間から、俺の人生は一変した。

変な黒服に『IS』操縦者のための特殊国立高校、「IS学園」に入学願書を押し付けられてから、選択肢も無いまま・・・ほとんど無理矢理、この学園に押し込められた。

「セシリア・オルコットですわ。ご存知でしょうが、イギリスから派遣されて日本へ・・・」

いや、「IS学園」と「藍越学園（学費の安さと就職率の高さが売りの私立高校）」の受験会場を間違えたり、勝手に置いてあった『IS』に触った俺にも悪い所はあったのかもしれないけど。けどさ・・・これは罰にしては重すぎると思うんだ、神様。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。オルコットさんの自己紹介も終わったからね、だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

いや、別にそこまで謝らなくても・・・と言いたくなるほどに俺の目の前でオドオドとペコペコしているのは、俺のクラスの副担任、山田真耶先生。

低い身長、だぼつとした服に大きめの眼鏡、短い緑色の髪 of 女教師・・・見た目的には、学生で通りそうな先生だな。

ここで状況を再確認、今日はIS学園の入学式で初めてのクラス、絶賛、自己紹介中。

ここまでは良くある話だ、つまり次は俺が自己紹介する番と言っただけで。

未だにペコペコ頭を下げる山田先生に「大丈夫、ちゃんとしますから」と答えて、最前列と真ん中と言っある意味最悪の席で立ち上がる。

ここまでは良い、極めて普通だ、問題は・・・。

「織斑一夏です、えー……よろしくお願いします」

問題は、クラスメイトが……いや、全校生徒、教員から用務員に至るまで、ほぼ全員が女だと言うことだ！

実際、俺の他のクラスメイト29名は全員、女だ。

そりゃそうだよな、『IS』は女しか使えないんだから、その操縦者を養成する学校は女しかいないに決まってる、おかしいのは俺だよ悪かったな。

「えー……以上です」

ガタタタンッ、と何人かの女生徒がズツコケた。

し、仕方無いだろ、他に女子相手にどんな自己紹介をしろと……あれ？

その時、俺は窓際に座る女子と目が合った。

と言うか、あの黒髪ポニーテールは、確か……。

「……箒？」

そう、篠ノ之箒だ。

小学校まで一緒だった、幼馴染と言う奴で……「凜とした」って雰囲気ピッタリ当てはまりそうな、典型的な大和撫子。

ただし、何と言うか目つきが鋭くて睨んでいるように見える……性格は、見た目通り「キツイ」。

「・・・まともに自己紹介もできないのか、お前は？」
「は？・・・いつ！？」

突然、何か固い物で頭をはたかれた。

こ、この速度、この容赦の無さ、そして声。
もしかしてと思って振り向いてみれば、そこには思った通りの人物
がいた。

げえっ、関　！？　じゃなくて・・・。

「ち、千冬ね・・・」

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

ちふゆねえ
千冬姉・・・俺の実の姉が、そこにいた。

黒のスーツとタイトスカート、狼を思わせる眼差しとスラリとした
体形。

箒とは別の意味の「鋭さ」を備えた、見るからに才色兼備な・・・
と言つか、何でここに？

「あ、織斑先生、会議はもう終わられたんですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

・・・って、先生！？

先生って言ったか今！？　そ、そんな話、聞いて無いぞ・・・と、
俺が抗議するよりも先に。

クラスの女子達が、黄色い声を上げた。

「キヤ　　ッ、本物の千冬様！　千冬様よ！」

「愛してます！」「美しすぎます！」「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れて北九州からこの学園に来たんです！」

「お姉様のためなら死ねます！」

・・・大人気、だった。

いや、まあ・・・仕方無いけどさ、でも当の千冬姉は「馬鹿が多いな・・・」とか言ってるし。

それをクールと勘違いしたのか、女子達はさらにヒートアップ。

み、皆さん？　あれはポーズじゃなくて本気で言ってるんですよ・・・

・・・？

いや、「もつと罵って」とか「躰けてください」とか言ってる場合じゃ無くてね？

「ほら、静かにしろガキ共・・・ちょっとした事情で入学式に間に合わなかった生徒を紹介する」

・・・あ、まだいるのか、どうせ女子だろうけど。

女の中に、男が1人、しかも3年間。

・・・いや、思ったよりキツいんだぜ・・・？

俺がそんな風にこれから先のことを思い悩んでいると、廊下から教室に入ってきて、千冬姉の隣に立ったのはやっぱり女子。

肩のあたりまで伸びた黒髪に、シャープで綺麗な顔立ちだけどキツさは感じない雰囲気。

むしろ、ほわほわと柔らかい感じ・・・制服はもちろんIS学園、1年用の青いリボンが胸元で揺れる。

太腿まで覆う黒い靴下・・・オーバーハイって奴か？ 良く分からないけど。

・・・あれ？ でも何だかどこかで会ったような・・・？

「えーっと、篠ノ之楓です。何年か行方不明になってましたけど、どうぞよろし・・・はうっ!？」

すぱーんっ、自己紹介を始めた瞬間に千冬姉に頭をはたかれた。

あ、少し親近感・・・じゃなくて、篠ノ之、楓？ 楓って言えば・・・。

・・・・・・箒の、妹の？

ゆ、行方不明だったって・・・俺は慌てて、窓際の箒の方を見た。

・・・箒は、まるでそっぽを向くように窓の外を見ていた。

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

織斑千冬、元IS日本代表にしてISの世界大会である「モンド・グロッソ」の総合優勝及び格闘部門優勝者、わかりやすく言えば元

「世界最強」。

現役を退いた後は、ここIS学園の一教師に甘んじている……とは言え、今でも彼女の崇拜者は多い。

『ブリュンヒルデ』……織斑千冬は、現役引退から数年経つても、敬意をもつてそう呼ばれますの。

ISのイギリス代表の候補生、つまりエリートである私もわたくし織斑千冬のことは認めざるを得ませんし、国からも「できれば仲良くするよ
うに」と言い含められておりますわ。

「……であるからして、ISの運用には……」

今は、山田先生がISの基本的に関する基本的な抗議をしています
わ。

織斑千冬……織斑先生は、教室の後ろで腕を組んで授業の様子を
見えています。

そちらももちろん、気になりますが……私が国から気にしろと言
われているのは、別の人間。

織斑一夏、あの織斑先生の実の弟にして「世界で唯一ISを動かせる男」……。

……でも正直、拍子抜けですわ。
基礎の基礎の部分の再確認の授業に過ぎませんのに、彼はそれについていけない様子なのですから。

山田先生が「どこがわからない」と聞けば、「全部わからない」と答える始末。

その上・・・。

「・・・織斑、入学前に渡した参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

・・・と、バカ丸出しで答えて織斑先生に殴られています。

ISは現行の兵器を凌ぐ新時代の兵器、基礎知識も訓練も無しに動かせる物ではありませんのに。

本当にあの男がISを動かしたのでしょうか、どうにも信じられませんが。

所詮、男なんてそんなもの。

このエリートの私がこんな極東の島国に来たのは、あの男の調査も1つの目的ですけど。

正直、男であると言う以外に取り立てて報告すべき点は見つかりませんわね。

大体、男がISに乗るだなどと生意気に過ぎますもの。

今は、物珍しさで優遇されて目立っているだけ・・・。

「はい、では2時間目は終了です。休憩時間ですよ」

山田先生がそう言って、授業が終わりましたわ。

内容としては、代表候補生である私にはつまりませんでしたけど。

まあ、なかなかお上手な講義だったのでは無くて？

・・・本当は、男などに話しかけるなど、私のプライドが許しませんけれど。

1時間目の休み時間は、ポニーテールの女子に先を越されて話しかけられませんでしたから、今、仕掛けることにしますわ。

これも国のため、私のプライドは一時置いて、話を聞いてみることにしますわ。

「ちよつと、よろしくて？」

・・・本当は、嫌で嫌でたまりませんけど。
ああ、代表候補生も^{エリート}楽ではありませんわね。
私が声をかけると、その男は振り向いて・・・。

Side 篠ノ之 楓

東お姉ちゃん、私は今、凄く興奮してるよ。

学校、しかも教室でちゃんと授業を受けられる日が来るなんて。

子供の頃は病弱で寝たきり、それからは東お姉ちゃんについて行っていたから・・・。

人がたくさんいるのは少し怖いけど、それでもやつぱり楽しい。
もう、ソワソワしちゃってもう、押さえきれないよね・・・！
おおっといけない、さっきも千冬姉様に叱られたし、平常心平常心・
。。。

「ねえねえ、楓ちゃんって呼んでも良い？」

「おおっ！？」

「・・・？ どうしたの？」

「い、いえ、何でも無いです、何でも無いですよ！」

「そっか、じゃあ良いや」

早速、クラスの人に話しかけられた。

こ、これは、お友達になるチャンス・・・かも。

私に声をかけてきたのは、何だかおっとりした感じの女の子。

袖丈がやけに長い制服 ある程度の制服改造は校則で許容
を着た子で、ネズミさんの髪飾りをつけた長い髪に、とても眠そ
うな目が特徴的。

・・・心無し、束お姉ちゃんに似てる気がする。

「あ、えっと・・・」

「あ、私？ 私はねー、のほけ布仏 ほんね本音だよ」

「布仏さん、布仏さん・・・はい、覚えました」

「ありがとー、でも本音で良いよ」

「どういたしまして、本音さん」

おお、普通に会話できてる、できてるよ……！
このまま、お友達になれたりして……あれ？
……お友達って、どうやってなるんだろう？

「でねでね、楓ちゃんはどうして入学式に来なかったのかな、かな？」
「え、えー……道に迷って？」

「おお、楓ちゃんは方向音痴さんなのかな？」

「ちん……ああ、いや、そんなはずは……」

ただ学校と言う物に興奮してただけで、普段は……道に迷うなんて。

……ち、ちよつとだけしか。

それに千冬姉様にも会えたし、箒姉さんにだって……ああ、そう、箒姉さん！

慌てて振り向くと、窓際の座席で1人、窓の外を見ている箒姉さんを見つける。

最後に会った時と変わらない髪型と雰囲気、私のもう1人のお姉ちゃん。

私がここに来たのは、東お姉ちゃんの「お願い」のせいだけど……でも、箒姉さんにも会いたかった。

年に2、3回くらい、電話で話すくらいしかできなかったし、早速声を……。

「私を知らない！？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの

代表候補生にして入試主席のこの私を！？ 私の華麗な自己紹介が胸に響かなかったと！？」

急に大きな声がして、教室が静まり返った。

何かと思えばこのクラス唯一の男子　　わ、そう言えば一夏さんとも同じクラスなんだよね、声かけなきゃ　　の前で、金髪の女の子が凄く怒ってた。

かすかにロールのかかった長い綺麗なプラチナブロンドと、透き通った青い瞳。

欧米人特有の肌の白さとスタイルの良い身体、全身から「私、優秀です」なオーラを放ってる女の子。

セシリア・オルコットって名前は知らないけど・・・イギリスの代表候補生なんだ。

代表候補生は読んで字のごとく、国家のIS代表の候補生のことだよ。

オルコットさんが、今まさに一夏さんに説明してる。

「つまり私は、エリートなのですわ！　泣いて頼むなら、優しくしてあげても良くてよ？」

・・・えっと、アレは学校で友達を作る時に言う台詞なのかな？
良し、じゃあ私も早速、えっと・・・な、泣いて頼むなら。

「何せ私、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから

「？」

「・・・入試つてアレか？ ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「は・・・？」

ざわっ・・・な、何だか教室の雰囲気が。

に、入試？ 入試・・・私は何か、束お姉ちゃんがいろいろしてたことしかわからないけど。

えっと、どれのことかな・・・？

「あ、貴方も・・・教官を倒したって言うんですの！？ 入試で！？」

「あ、ああ・・・たぶん」

「たぶんって何ですの、たぶんって」

あ、チャイムだ。

3時間目が始まる、オルコットさんは何か言いながら自分の座席に戻る。

「楓ちゃん、じゃあまた後でね」

「あ、はい・・・また・・・」

そして当然、本音さんも座席に戻る。
くう、お友達になり損ねた！

まあ、でもまた後ですってことは話しかけて貰えるってことで・・・。

「・・・あ」

ふと、窓際の座席から篝姉さんが私のことを見ていることに気付いた。

笑顔で小さく手を振ったら、ぷいってそっぽを向かれた。

・・・あ、あれ・・・？

S i d e 千冬

3時間目は、ISで実際に使われる武装に関する講義・・・の前に、再来週のクラス対抗戦（もちろん、ISで、だ）のクラス代表いこうたいひょうを決めるつもりだった。

・・・が、何だこの状態は。

「納得できませんわっ！！」

どう言うわけか知らんが、オルコットが息を巻いている。

それはクラスのガキ共が私の弟・・・つまり一夏をクラス代表にしようとする推薦を重ねた後のことだ。

・・・本人はやりたがっていないようだが、それはどうでも良い、

推薦された者に拒否権など無い。

オルコット曰く、男がクラス代表など恥さらし以外の何者でも無い。クラス代表はそのクラスの実力ナンバー1がなるべきで、それには代表候補生であり「専用機」持ちである自分こそが相応しい・・・と言っのが言い分だ。

まあ、「実力ナンバー1がなるべき」と言う部分には首肯してやつても良いが。

「物珍しさで男をクラス代表にするなんて・・・サーカスじゃありませんのよ!？」大体、文化としても後進的な極東の島国で暮らさなければならぬこと自体、私にとっては耐え難い苦痛ですのに・・・!」

「イギリスだつて島国だし、大したお国自慢無いだろ」

口を滑らせおつたな、馬鹿者が。

聞き流せば良いだろうに、一夏がオルコットの祖国を「侮辱」

先に日本を「侮辱」したのはオルコットだが したことに腹を立てたオルコットが、一夏に決闘を申し込んだ。

「・・・良いぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

そして一夏も、それを受ける・・・何だこの流れは。

大体、一夏はまだ機体も無いと言っのにどう「決闘」するつもりだ、馬鹿が。

・・・まあ、一夏には政府が「専用機」を用意するらしいから、そこは問題無いだろうが。

・・・「専用機」。

代表・代表候補生や企業に所属する人間に与えられる専用のIS。特定の個人にしか使用できない、まさに「専用機」だ。IS学園でも、「専用機」を持っているのは数える程しかない。このクラスで言えば、オルコットと・・・一夏、そして・・・。

「・・・」

私の視線の先には、まだ実技試験を受けていないのに入学が確定している生徒がいる。

篠ノ乃楓、後で日程は伝えるが・・・ISさえ動かせれば基本は合格だ。

第一、アレは束の下でISについて叩き込まれた馬鹿だ。

一夏も似たような状態で入試を受けたが、それは形式として受けたに過ぎない。

その意味では、無意味な通過儀礼に過ぎない、が・・・。

・・・脳裏に、束の送りつけて来たデータの内容を思い浮かべる。束は、本当に何を考えているんだろうな。

妹に個人所有の「専用機」を授けて、IS学園に送りつけてくるのだから・・・。

S I d e 一夏

はぁ・・・疲れた。

今日の授業が終わって、自分に割り振られた寮の部屋に向かいながら、俺は溜息を吐く。

今日は本当に疲れた、女子にはジロジロ見られるし、変な奴・・・セシリア・オルコットだっけ？ には、突っかかられるし。

しかも、来週の月曜に第3アリーナとか言う場所で勝負しなくちゃいけないとなった。

勝負自体は良いとして、ISバトル（最近はその言う名前の「スポーツ」として定着）なんてやったこと無いし・・・大体、教科書すら専門用語ばかりでさっぱりわからない。

「・・・まあ、やるしかないな。男が一度決めたことを撤回するわけにゃいかねーし」

教室でのことを思い出す、「男が女に（特にISで）勝てるわけが無い」と言わんばかりのあの雰囲気。

クラスの女子は皆、「セシリアに頼んでハンデつけて貰ったら？」とか言う始末だ。

しかもしれは、嫌味でも何でも無く・・・当然のこととして受け止められてる。

今の時代、男の立場は圧倒的に弱い、女尊男卑と言っても良いくらいに。

ISは現行兵器を鉄屑同然にした新時代の兵器、だからそれを扱う女性の立場が急上昇するのもわかる、IS（及び操縦者）の保有数が即軍事力・防衛力になる時代なんだから。

実際、ISを操縦できる可能性のある女性に対しては国も企業もこれでもかと言くらいに優遇措置を取る、それもわかる。

だけど・・・国家の軍事力になるからIS操縦者、つまり女性は偉くて男性はいらない。

・・・それだけは、何か違うと思う。

「まあ、男と女で戦争したら男陣営は3時間で負けるだろうけど」

悲しい現実を口にしつつも、俺は頬をぱんつと両手で叩いた。

いけないいけない、思考がマイナスになっちまってたな。

とにかく、この1週間で基礎だけでも・・・き、基礎・・・基礎か・・・。

「・・・はあ、束さんも面倒な物を作ってくれたよなあ」

別に束さんが悪いわけじゃ無いけど・・・千冬姉の親友の顔を思い出す。

記憶の中にあるのは、何を考えているんだかわからない人を喰った

ような笑顔。

・・・あの人がISを開発したって言うの、わからなくも無いけど、イマイチ実感がわかない。

昔からやたらに天才だったのは覚えてるけど・・・そうだ、束さんだよ！

「箒と・・・あと、楓か」

今日、6年ぶりに再会した幼馴染2人のことを思い出す。

・・・って言っても、箒とはガキの頃に通ってた剣道の道場で良く一緒だったけど、楓とはあまり会ったこと無いんだよな。

確かアイツ、身体弱くて・・・今は、どうだかわかんねーけど。

と言うか、自己紹介の時の行方不明って、アレ何だろうな？

束さんは今も絶賛、失踪中だけど・・・。

小4の時に箒の家が引っ越してから全然連絡取って無かったから、今アイツらの家がどうなっているのかもわからないし・・・いやいや。

「はあ・・・今日はもう良いや、とにかく寝よう」

とにかく、疲れた・・・もう寝たい。

えっと、千冬姉が用意してくれた寮の部屋「1025室」に向かう。部屋に入った後、俺は真っすぐにベッドに向かった・・・。

Side 篠ノ之^{ほつぎ} 篇

・・・6年ぶりに、一夏に会った。
休み時間にほんの少しだが、話せた。
私だとすぐにわかったと言ってくれた、髪型が同じだったからと・
・。

「・・・良く、覚えていたものだ」

私の髪は、頭の後ろで結んでも腰まである程に長い。
それこそ、子供の頃から変えていない・・・もしかしたらと、思っ
ていたから。

一夏と会えた時、すぐに気付いてくれるだろうかと・・・。

・・・はっ!?

いやいやいや、一夏は関係無いぞ、一夏は、うん。

私は単純に、この髪型が気に入っているだけだ、それだけだ、うん。
・・・ま、まあ、覚えていてくれて、良かったと思わなくも無いが。
いやいや・・・軽く頭を振って、私はリボンを解く。

制服と下着を脱いで、タオルを手に寮の部屋のシャワールームへ。

「・・・ふう」

熱い湯のシャワーを浴びると、小さく息を吐く。

ぼんやりと湯を浴びながら考えるのは・・・やはり、一夏のこと。当たり前だが、6年前とは何もかも違う。

記憶にあるよりずっと大人で・・・そして、男らしくなっていた。

ニユースで見た時は、本当に驚いた。

忘れるはずも見間違えるはずも無い姿がテレビに映ったのだ、驚きもする。

世界で初めて、ISを動かした男として・・・。

「・・・だが」

キュッ・・・蛇口を捻って、湯を止める。

ポタポタと髪先から垂れる雫を見つめながら、私はもう1人のことを考えた。

そのもう1人とは・・・楓のこと。

この数年間、姉さん・・・「IS開発者」篠ノ乃 束と行動を共にしていただろう、双子の妹。

年に2回か3回、短い時間だが電話で話したことはある。

姉さんとは、1度も話したことが無いが・・・いや、それ自体はどうでも良い。

もつと、重要なのは・・・。

「・・・楓・・・」

・・・昔は、身体の弱かったあの子のためにと世話を焼いたこともある。

それなりに、姉妹仲は良かったと思う。

少なくとも、私と姉さんの関係よりはマシだったはずだ。

ただどあの日、姉さんが楓を連れ出して、どこかに消えて・・・それで。

・・・ボスンッ。

・・・？

今、シャワールームの外から、何か音がしたか？

「誰か、いるのか？」

シャワールームの外に声をかけながら、バスタオルを身に纏う。

・・・ああ、そう言えば今日から相室になるんだったか、元々2人部屋だしな。

となると、外にいるのは同室になる者か。

まあ、1年間一緒に生活するんだ、それなりの関係を築いた方が良いでしょう。

「・・・こんな格好ですまないな、私は篠ノ乃箒と・・・」

シャワールームの外に出て、部屋の中にいるだろう同居人に向けて挨拶する。

そして濡れた髪を払いながら顔を上げると、そこには・・・。

S i d e 篠ノ之 楓

放課後、私はホクホク顔で寮の廊下を歩いていた。

と言うのも、本音さんが彼女のお友達に私を紹介してくれて、その子達とも仲良くなれたから。

これって、お友達になれたってことかな？

だとしたら嬉しいなあ、同年代の女の子のお友達なんて初めてだから。

東お姉ちゃんはお友達とかいない人だけど、私は普通に嬉しい。

明日は私の実技試験をやるって千冬姉様が言ってたけど、ISが動かせれば良いらしいから。

えっへへー、お友達げつと！

そして同時に、買って所でドロップ缶もげつと！

「学校って楽しいなあ、本当に本当に楽しいなあ」

私のだって言う寮の部屋に戻ったら、束お姉ちゃんに秘匿通信で教えてあげないと。

まあ、メールを送り合うだけで電話とかじゃ無いけど・・・でも、その前に。

篤姉さんに会いたいな、昼間は結局、話せなかったし。

電話で話せなかったこととか、近況報告とか・・・束お姉ちゃんのこととか、いろいろ。

たくさん、お話しすることがあるからね。

えーっと、千冬姉様によれば姉さんの部屋は「1025室」で・・・。

「かりつとね・・・」

口の中に早速一粒、飴を放り込む。

普段は地図に弱い私も、飴を舐めてる間はドロップ大丈夫。

糖分を摂取した脳が活性化して、断然OKな状態に・・・。

「・・・お？」

とぼとぼ歩いていると、廊下に人だかりができている場所を見つけた。

廊下のそれぞれの部屋から女生徒が顔を出して、一つの部屋を見ている。

その部屋からは、何かドタバタと言う音が・・・かりっと、飴を上下の歯の間に入れてカリカリする。

次の瞬間、激しい物音がしていた部屋から何かが転がり出て来た。

・・・ドアが物凄い勢いで開いて、何かがまさに「転がり出て」きたの。

それは反対側の壁に激突する「いつてえ!？」と、唸りながら身悶えてた。

と言うか、一夏さんだった。

かりっ・・・小さくなった飴玉を、噛み潰してから飲み込む。

「・・・あつ、もしかしてこれって、最近の学校で流行ってる何かのゲームで」

「んなわけ無いから!・・・って、楓?」

「お久しぶりです、一夏さん。実に久しいのですが、ゲームで無いならいったい何を・・・と言うか、箒姉さんはどこにいるか知りません?」

「・・・まさに今、その箒に殴られた所なんだが・・・」

「お?」

一夏さんの指差した先には、何故か剣胴着姿の箒姉さん、手には木刀を持つてる。

もしかしてあの木刀で一夏さんを殴打したのかな、だとしたら凄く

危ないよ箒姉さん。

長い髪に鋭い目、数年ぶりに会う私の双子の姉が、そこにいた。

「箒ね・・・」

声をかけようとすると、箒姉さんは即座にドアを閉めた。

私を一瞥して、驚いた顔・・・それからキツイ顔になって、即座に。
・・・あ、あれ？

「・・・機嫌、悪かったのかな・・・？」

「まあ、良くは無いだろうけど」

一夏さんは、箒姉さんに何をしたのか・・・でも、今の箒姉さんの態度は、あくまで私に向けられていた気がする。

その後聞いた話だと、箒姉さんと一夏さんはこれから同じ部屋なの
だとか。

あー、私知ってるよ、同棲って言うんだよねそれ。

・・・結局。

その日は、箒姉さんと一言も話せなかった・・・。

第1話：「そのクラス、男女比率1：30」（後書き）

篠ノ之 楓：

はい、どうも、楓です。

今日は、ウチの家と家族環境について説明したいと思います。
東お姉ちゃん、箒姉さんの事以外はあんまり教えてくれないので、
自分で調べてみました。

篠ノ之家・・・

篠ノ之家は、神社の神主の家系です、つまり私達姉妹は巫女さんな
んですね。

私と東お姉ちゃんは全然ですけど、箒さんはお神楽を舞ったりし
てましたよ。ご近所ではお祭りとか・・・割と親しまれてた家みた
いですね。あと、剣術道場もしてましたよ、篠ノ之の流派はもとも
と、女性のための古い剣術でして。神に捧げる舞と古武術がくっつ
いて剣術に変わったらしいです、剣舞・・・と言うような意味で。
だから私達姉妹の中では、箒さんだけが正統な篠ノ乃流の継承者
たり得ると言うわけですね。

で、家族。

私は東お姉ちゃんと世界を巡ってましたが、箒さんはずっと日本
に。政府の重要人物保護プログラムで両親と各地を転々としてたら
しいですね。東お姉ちゃんがプログラムの実行機関に「何か」して
からは、千冬姉様のいるIS学園に・・・と言う感じだそうです。
でも、何故か両親はそのまま政府の保護下に放置・・・まあ、東お
姉ちゃんにも何か考えがあるんだろうけど・・・。

篠ノ之 楓：

はい、今回はここまでです。

次回から、学園生活がスタートですね。

えーと、私は束お姉ちゃんにいろいろと教えて・・・。

あれ？ データ消えてる・・・。

篠ノ之 束：

データは全部頂いたぜー！ ばーい、束おねーちゃん。

篠ノ之 楓；

えええ・・・。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

第2話：「クラス代表決定戦・前編」

S i d e 織斑 一夏

入学式の翌日、つまりは俺が幼馴染の箒との同居（と言うか、同室？）になってから一晩。

あれ以来、箒が機嫌が直してくれない。

確かにシャワー上がりの姿を見てしまったのは俺が悪い・・・悪いのか？　むしろ幼馴染とは言え年頃の男女を同室にする学園側に問題があるんじゃないだろうか。

まあ、この学園はそもそも男が通うことを想定して無いから・・・。

何せ、男性用トイレも無いってんだから・・・あと、大浴場も使えない。

どこを見ても女性、女子、女・・・。

ちなみに物心ついた頃から親がおらず、千冬姉と2人暮らした俺は女子に夢を見る程ウブじゃない。

なので、リアルに疲れるばかりで・・・。

「・・・と言うわけで、ISは宇宙での活動を想定して設計されているので、特殊なエネルギーバリアで身体を包んでいて・・・」

ちなみに今は授業中、セシリアとの決闘に向けて頑張ろうと意気込んでは見た物の。

・・・さっぱり、わからない。

千冬姉に貰った参考書で予習した分、単語がわかる程度で・・・根本的な所が、さっぱり。

だけど他の皆はうんうん頷いてるし、理解できてる様子だ。つまり、俺だけがついていけない。

窓際の幼馴染、箒を見ても・・・特段、困った様子は無い。

つまり、今やってるのはそれくらい基礎なわけで。

・・・結論、俺1人じゃどうにもならない。

「それからISにも意識のような物があつて、対話・・・つまり、一緒に過ごした時間だけ、わかり合う・・・操縦者の特性を、把握しようとするわけなんですね。これがいわゆる『コア』に経験を積ませると言われることで・・・練習は裏切らないと言うことですね」「先生、それって彼氏彼女みたいな関係ですかー？」

「え、えー・・・と、そうですね。でも私は経験が無いので、わかりませんけど・・・」

彼氏彼女・・・恋人とか恋愛とか、そう言う話になると空気が華やぐ。

と言うか、甘くなる・・・色で言うと黄色か桃色？

一言でいえば、「女子校」的な雰囲気。

まあ、男って俺1人だしな・・・むしろ、俺が邪魔な感じだ。

その割に、周りから物珍し気にジロジロみられるもんだから・・・
困る。

何と言うか、いたたまれない。

「んんっ、山田先生、授業の続きを」
「は、はいっ」

教室の後ろに立っていた千冬姉が、咳払い一つで教室の空気を引き締める。

このあたりは流石だと思う、おかげで助かった。
俺は小さく息を吐くと、教科書に目を戻して・・・。

・・・やっぱり、わからない。

まあ、ここに来て初めてISの勉強を始めたわけだから、仕方が無い、はず。

でもセシリアとの勝負は、来週なわけで。
困り果てた俺は、もう一度、箒の方を見る。

「・・・っ」

一瞬だけ目が合って・・・って、おい、目を逸らすなよ、傷付くだろ。

はぁ・・・とにかく、箒に教えてくれるよう頼んでみよう。

同じ部屋だし、教えて貰う分には不自由しない・・・と思う。

千冬姉に頼んでも教えてくれるだろうけど、忙しいだろうし・・・

鼻屑だと思われるのもアレだし。
でも箒って、まだ機嫌直って無い、よな？

憂鬱な気分になりながら、教室を歩く山田先生の姿を追いながら少し後ろを見る。

すると、視界の隅の座席に見た顔がいた（いや、クラスメイトは全員見た顔だが）。

箒と似た顔だが雰囲気は真逆、むしろ束さんに近い幼馴染。

篠ノ之楓・・・何故か背筋を伸ばしてニコニコしながら両手で教科書を開いてる。

・・・何がそんなに楽しいんだ・・・？

「・・・はあ」

溜息を吐いて前を向いて、教科書のページを開きながら、ふと昨夜のことを思い出す。

箒に会いに来たらしい楓と、少しだけ話した。

箒自身は、どうしてか楓と会おうとしなかったけど。

・・・後で聞いても、箒はその件については何も答えてはくれなかった。

まあ、元々機嫌、悪かったしな。

で、楓からは束さんが元気だと言うことを聞いた。

あの人が元気で無い所が想像できないけど、元気だと聞いて悪い気はしない。

楓もすっかり身体も良くなったって言うし、良いことづくめだ。

何はともあれ健康が1番、だからな。

S i d e 篠ノ之 楓

はあ 、 「授業」 っ て楽しいなあ！

こう、本当に教科書に沿って進めて行くんだね。

学校にあんまり来たことが無いから、感無量だよ。

まあ、でも・・・ばらばら、教科書をめくってみる。

・・・ISを完全に「兵器」扱いしてるのは、ちよっただけ不満。
だって、東お姉ちゃんはそのためのためにISを作ったわけじゃ
無いもの。

「おお、楓ちゃんご機嫌だお」

「うんっ、学校って面白いね！」

「はわ、え、笑顔が眩しい」

休み時間には、お友達とお喋り。

本音さんはお友達が多い人みたいで、おかげでたくさんのお友達に
紹介して貰えた。

本音さんには感謝感激、ちなみに本人が私に声をかけてきたのは。

「生徒会長に聞いて、興味あったからだよ」

とのこと。

ははぁ、生徒会長、私の入学資料でも見たのかな。
実技試験、ただけ。

何でも本音さんは「生徒会」のメンバーで、しかも整備科志望なのだとか。

ちなみに、私も整備科志望。

2年生からは科が別れると言う話で・・・本音さんはお姉さんが整備科にいるとか。

私も東お姉ちゃんの影響でISは動かすより整備したりする方が好きで・・・親近感が湧く。

私がそう言つと。

「じゃあ今度、かんちゃんを紹介するよぉ」

「かんちゃんさん？」

「うん、4組の子。きっと仲良くできると思うよ」

本当に本音さんはお友達が多い、まだ学校が始まって2日目なのに。うーむ、この間延びした独特な喋り方が人を引き寄せるのだろうか・・・。

私も、見習った方が良いかな・・・？

「ええ つ、織斑君って専用機が貰えるんですか!？」

「1年の、しかもこんな時期に!？」

その時、一夏さんの周辺から大きな声が聞こえた。

そこには千冬姉様と山田先生もいて、前者はうるさそうに、後者はアワアワしながら一夏さんに話しかけてる。

「・・・で、だ。本来なら専用ISは国が企業に所属する人間しか与えられないが、お前は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「な、なんとなく・・・」

専用機、専用IS。

読んで字の如く、個人に与えられる専用のISのこと。

ISはコアの数(467個)しか作れないから、つまりはどう頑張っても世界で467人しかISを持てない。

東お姉ちゃんは、467個目を作ってから国にも企業にも提供しなくなつたから・・・。

世間的にはいろいろ言われてるけど、個人的には飽きただけだと思う。

「あ、あの、先生。篠ノ之さん達って、篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・？」

「ああ、2人ともアイツの妹だ」

おおっと、いきなり個人情報漏洩・・・いや、別に隠してないけど。

束お姉ちゃんは、ISのコアが作れる唯一の人間。

そして、今も失踪中（今や私にも居場所がわからない）。

でもいろいろ言われるかと思ったけど、思ったほど私、何も聞かれなかったな……。

「す、すごいっ、このクラス。有名人の身内だらけじゃん!？」

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？ やっぱり天才!？」

「篠ノ之さん達も天才だったりする!？ 今度ISの操縦教えてよ!」

そして、にわかに活気づく1年1組。

篝姉さんと、あと私の所にもたくさんの女生徒がやってくる。

おお、こんなにたくさんの人に囲まれると……緊張する。

子供の頃も束お姉ちゃんと一緒にいた時期も、人に囲まれた経験が無いから。

でも、束お姉ちゃんは本当に人気者なんだね。

それは嬉しい、だから私は話せる範囲で束お姉ちゃんのことを……。

「あの人は関係無い!!」

耳元で叫ばれたかと錯覚するような、大きな声。
声の主は、篝姉さん。

「・・・大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃ無い。教えられるようなことは何も無い」

静まり返る教室、箒姉さんは足早に歩き出して・・・どうしてか一旦、私の方へ。

お、お・・・？

何か話しかけられるのかと思えば、私の目の前を通り過ぎてそのまま廊下へ。

箒姉さんに押しのけられるような形で、私に寄ってきていた生徒が私から離れる。

・・・？

「ね、姉さ・・・」

声をかけようとしても、にべも無く教室の扉が閉められる。
うつ・・・昨日もだけど、今日も箒姉さんと話せないかも・・・。
と言いか箒姉さん、授業だよー・・・？

「・・・ほら、不満そうにするなガキ共、授業だ授業」

後には、千冬姉様の手を打つ音が、虚しく響く・・・。
と言いか、不満って何？

不満そうにする箇所、どこかにあったかな？

Side セシリア・オルコット（イギリス代表候補生）

男が、生意気にも専用機！

データほしさ
物珍しさでの提供と言っことらしいですが、それにしても不愉快ですわね。

専用機持ちと言う意味で、あんな男と私が同格に置かれたと言っことなのですもの・・・。

・・・まあ、良いですわ。

専用機持ちにも、格の違いがあることを教えて差し上げますわ。それに同じ条件で戦った方がフェア・・・そして嫌でも実力の違いを思い知るでしょうから。

男が女に勝てるなんて、あり得ないのだと言っことを。

「安心しましたわ、まさか訓練機で対戦するとは思っていませんでした。しょうけど？」

授業が終わった頃を見計らって、あの男に声をかける。

織斑一夏、不愉快にも世界中が注目していると言っ男に。

「私も専用機持ちですから？ 訓練機を相手にするのもフェアではありませんからね」

「へー……」

「馬鹿にしますの？」

「いや、すげーとは思っけど……どうすげーのかわからないだけで」

それを一般的に、馬鹿にしていると言うのではなくて！？

……ふう、いけませんわ、庶民、それも男に感情を乱すなんて私らしくも無い。

ま……男ですから、知らないのも無理はありませんわね。

専用機は、極端に言えば世界人口60億の中で選ばれた467名にしか与えられない稀少な機体。

代表候補生の中でも、専用機を与えられるのは私を含めてほんの一握り。

すなわち、エリート中のエリートにしか与えられない特権。

女性優遇のこの時代、専用機持ちはある意味で国家首脳よりも強い権限を持っていますのよ？

それを、こんな男などに……本当に気に入りませんわ。

「……そう言えば貴女、篠ノ之博士の妹さんなんですってね？」

どう言うわけかこの男……織斑一夏の傍にいる篠ノ之箒と言う少女に、声をかける。

入学時に見た名簿と自己紹介の時にもしやと思っていました、先程の休憩時間の騒動で言質を取れましたもの。

何しろ、日本人の名前の特徴とか、まだ良くわかりませんの。

とにかく、この篠ノ之箒と言う少女はあの稀代の大天才、篠ノ之束博士の妹。

ISの開発者にして世界唯一のコア製造者、各国が血眼になって探している、あの篠ノ之博士の。

ISの保有数が軍事力の大きさに直結する現在、篠ノ之博士を味方に引き入れた国家が覇権を握るのは自明。
だからこそ、その妹である篠ノ之箒はイギリスの人間として放置できない……。

「妹と言っただけだ」

「……ま、まあ、どちらにしてもこのクラスの代表に相応しいのは私、セシリア・オルコットであることをお忘れなく」

とりあえず言いたいことは言いましたし、こんな男の近くからはとつと離れるが吉ですわ。

……べ、別に篠ノ之箒の目つきに気圧されたわけではありませんでしてよ？

そこの所、誤解無きように。

……後で、もう1人の妹さんの方に声をかけましょう。

篠ノ之箒よりは、とつきやすそうでしたもの。

……いえ、別に篠ノ之箒が怖いとかそう言うわけではけしてなくてですね……。

とにかく、誤解無きように！

昼休みになると、一夏は私を昼食に誘ってきた。

私は良いと言うのに、無理矢理・・・他のクラスメイトも誘おうとした所を見るに、今日の休み時間での一件以来クラスで浮いていた私をフォローしてくれようとしたのだと思う。

好意は嬉しいが・・・クラスの女子は私では無くて一夏と食事に行きたかっただけだと思う。

だから良いと言ったのに、一夏は私の手を離してくれなかった。結果、恥ずかしさの余りに、その・・・古武術で一夏を床に投げってしまった。

それを見たクラスの女子は散ってしまって・・・一夏は溜息を吐いていた。

わ、悪いことをしてしまったが、呆れられてしまったらどうか・・・？

「よし箸、飯を食いに行くぞ」

「い、いや、私は良いと・・・」

「黙ってついてこい」

「・・・む」

そして最終的には、一夏と2人きりで食堂で昼食を取ることになった。

いや、別に2人きりになるのを狙ったわけでは無くて・・・そう、これは一夏が無理矢理、故に私は悪く無い。

「良いか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箒だからしてるんだぞ？ 幼馴染で同門なんだからな」
「べ、別に・・・頼んで無いだろ」

幼馴染で、同門だから。

一夏はそう言った。

私の家は、剣道の道場をやっている・・・子供の頃、一夏とそこで一緒だった。

男の子にイジめられていた私を、助けてくれたりとか・・・まあ、いろいろあった。

・・・懐かしい、な。

楽しかった、毎日がドキドキして・・・本当に。

・・・姉^{たばね}さんが、ISなんか作るまでは。

そのせいで、一夏とも、父さんや母さん、それに楓・・・・・・・・離れ離れに、一家離散だ。

私の幼少時代は、そこで終わったんだから。

「そっぴやさあ」

「・・・なんだ」

いけない、せっかく一夏が昼食に誘ってくれたのに。

私は慌てて定食の味噌汁に口をつける。

「ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負で何もできないまま終わっちゃう」

かつ・・・と、身体が熱くなるのを感じた。

一夏が私に、ISのことを教えてほしいと頼んできた。ただ私は。

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿め」

違う、こんなことが言いたいわけじゃないのに。

・・・自分が嫌いになりそうで、ほうれん草のおひたしを箸でつつく。

「頼むよ、箒、なあ・・・」ねえ、キミ」・・・へ？ 俺ですか？」

「キミって噂の子でしょ？ 代表候補生と試合するって本当？」

「・・・？」

その時、先輩 リボンの色からして、3年生 が1人、話しかけて来た。

名前も知らない、たぶん、一夏も知らない。

良く分からないが、一夏の隣の椅子に図々しく座って・・・な、何なんだ？

「キミってさ、IS稼働時間いくつくらい？」

「え？ えーっと、20分くらい？」

「それじゃあ無理よ、稼働時間」上達・強さだもの」

ISの稼働時間は、操縦者の熟練度に比例するのは確かだ。

昔でいえば戦闘機乗りの飛行時間、それはISでも変わらない。

代表候補生クラスになれば、300時間は最低でもISの稼働訓練を受けているだろうな。

「・・・で、さ？ 私が教えてあげようか、ISのコト」

「・・・！」

突然、その先輩がまるでか、一夏に身体を擦り寄せるようにそんなことを言った。

さつきとは別の意味で、身体が熱くなる。

一夏自身は特に何も感じていないような顔をしているが、私は気が
気じゃ無い。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

「あ、教えてくれるの？」

「あれ？ でも貴女1年生でしょう？ 私の方が上手く教えられる
と思うよ？」

先輩の言葉に、たじろぎそうになる。

確かに、1年生が教えるよりも3年生が教える方が良いと考えるのが普通だ。

それに私自身、そこまでISに乗った経験があるわけじゃない。少なくとも、代表候補生クラスには及ばない。

だけど、このままだと一夏がとられる。

せっかく、一夏と話ができるのに・・・何か、何か無いか。

私が3年生よりもISについて詳しいと、わからせる何か・・・。

「・・・私は」

・・・どれだけ考えても、1つしか無かった。

でもそれは、とても身勝手で・・・本当に、嫌で。

だけどそれしか思いつけない自分が、とてつもなく・・・。

「私は、篠ノ之束の妹ですから」

さっき、クラスであれ程「関係無い」と啖呵を切っておきながら、都合の良い時だけ、姉たばねさんの名前を出す。

「篠ノ之つて・・・え、ええ!？」

「・・・ですから、結構です」

「そ、そう・・・それなら、仕方無いわね」

先輩が、私の言葉に・・・姉たばねさんの名前にたじろいで、去って行く。その背中を見つめながら、私はどうしようも無く嫌な気分になっていた。

「何だ・・・教えてくれるのか？」

「そう言っている」

一夏の言葉に叩きつけるようにそう返して、私は再び味噌汁を啜った。

・・・一夏の顔を、見れなかったから。

Side 一夏

放課後、箒に剣道場に来いと言われた。

いや、俺はISのことを・・・と言おうとしたら、「一度、腕が鈍っていないか見たい」と返された。

その後は「見てやる」の一点張りだったもんで、俺は了承するしか無かった。

千冬姉と言ひ箒と言ひ、俺の周りには強情な女しかない。そう言う運命なのかもしれない、やれやれだ。

「行くぞ」

「ああ」

放課後、剣道の道着やらタオルやらを取りに一旦、寮の部屋に戻った。

・・・まあ、つまりは同じ部屋なのだけれども。

やっぱりこれ、問題あるよなあ・・・。

箒だって嫌だろうし、早く個室を用意してくれない物が・・・。

いや、本当は個室が用意できるまでは自宅通いの予定だったんだよ。でも家にいると日本政府とか各国大使館とか研究所から、「生体を調べさせてほしい」って人が押し掛けてくるんだよ、誰が頷くか馬鹿。

いくら「世界初の男性IS操縦者」だからって、人を実験材料みたいに言うなよ。

・・・で、千冬姉によって無理矢理、箒の部屋に押し込まれたわけ。

普通、女の子いれるだろ・・・妹の楓とか、でもそう言ったら。

「姉妹や血縁者を同じ部屋にしてはならない」

・・・と言う規則を示されて、そうですかーと引き下がらざるを得なかった俺である。

ああ、そうだ楓と言えば・・・。

「・・・なあ、箒」

「なんだ」

「楓とは話したのか？」

「・・・」

「・・・おい」

「・・・」

「・・・無視ですか、そうですか。」

束さんのこともそうだけど、箒は楓のことが会話に上ると黙っちまうんだよな。

箒と2人、寮の廊下を歩きながら腕を組んで考える。

えーっと、確か束さんがISを作った小4の頃に転校してからのことを、俺は良く知らないんだよな。

日本政府の重要人物保護プログラム・・・だっけ？　で、いろんな場所を転々としていたってことしか。

だから中3の時、新聞で箒が剣道で全国優勝した記事を見た時は驚いたぜ。

「・・・いや、今はその話は良いな。」

しかしアレだ、親に捨てられて千冬姉と2人暮らした俺に言わせると、姉妹仲が良くないって言うのは気になるんだよな。

どうにか、話だけでもさせられない物か・・・。

「なあ、ほう・・・き？」

「・・・」

その時、箒が立ち止まった。

表情は強張っていて、その視線を追うと・・・そこには。

何人かの生徒に囲まれた、楓の姿があった。

何してんだ、アイツ・・・？

S i d e 楓

・・・どうしよう、東お姉ちゃん。

今日も、箒姉さんとちゃんとお話できなかったよ・・・！

数年ぶりの再会だから、もう少しこう、何かあると思ってたんだけど。

「東お姉ちゃんだったら、有無を言わず抱きついて来るのに・・・」

そんなことをブツブツと呟きながら、寮の自分の部屋から箒姉さんの部屋に向かう。

まあ、良く考えてみれば箒姉さんは東お姉ちゃんと違ってスキンシップとか好きじゃ無かったしね。

むしろ東お姉ちゃんが過剰だと思う。

あれ？　じゃあ篝姉さんの反応が常識のある普通の行動なのかな・・・？

それはそれとして今日こそ、篝姉さんとちゃんと話しないと・・・。

東お姉ちゃんから、篝姉さんにいろいろと言伝ても頼まれてるし。何より、私が篝姉さんといういろいろお話したいし。

「あ、あの子じゃない？」

「ホント？　噂になってる子？」

「・・・お？」

途中、寮の廊下で何人かの生徒に鉢合わせた。

私と色の違うリボンをつけてるから、上級生だね。

2年生か3年生かは、ちょっと自信が持てないけど。

「ねえねえ、ちょっと良い？」

「あ、はい、何でしょう？」

「貴女、篠ノ之博士の妹さんって本当？」

「えーっと・・・まあ、はい、そうです」

噂とは何のことやらさっぱりだけど、東お姉ちゃんの妹って意味ならその通り。

隠す意味も無いし、と言うか調べれば一発だしね。

学校って噂が広まるの早いつて聞いてたけど、本当なんだね。

ちょっと感激、生で見れるなんて。

私が頷くと、先輩方は黄色い声を上げる。
おおう、ちょっと耳に来た。

「ねえねえ、篠ノ之博士ってどんな人？」

「やっぱり天才？ 頼んだら会わせてくれたりする？」

「と言うか、貴女も当然ISに詳しいのよね？」

矢継ぎ早の質問、どれもこれも答えにくい物ばかり。

まず、東お姉ちゃんがどんな人かって言われても困る。

私のお姉ちゃんでも・・・そりゃあ天才なんだけど、でも私からしても変な人だし。

会いたいと言われても、私も居場所知らないし。

と言うか、私もだけど東お姉ちゃん、出てきたら捕まるんじゃないかな。

この間なんて、どこかの国の戦闘機に撃墜されそうになってたし。

で、最後のは・・・私が東お姉ちゃんに及ばないのは私が1番良く知ってるし。

私知ってることなんて、基本的には教科書に全部書いてるし。

・・・それ以外で、何を聞きたいのかさっぱりわからない。

うーん、でもちゃんと答えないと・・・。

「・・・何をしているんですか？」

その時、聞き覚えのある声がした。
顔を上げると、そこには。

「・・・箒姉さん」

剣道の道具らしい荷物を持った箒姉さんと、一夏さんがいた。
一夏さんはのほほんとしてたけど、箒姉さんの目が凄く険しい。

「箒って・・・あ、もう1人の方じゃ無い？　あと、男の子だ・・・」

「

「ホント？　ねえ、貴女も篠ノ之博士の妹さん・・・」

「妹と言っただけですが、何か？」

「あ、いや・・・」

ギロリ、そんな擬音が聞こえて来そうなくらいの目つきで先輩方を
睨みつける箒姉さん。

隣で、一夏さんが溜息を吐いてる。

箒姉さんの剣呑な雰囲気吞まれたのかどうなのか、先輩方はそそ
くさと去って行った。

「あ、えと、箒ね・・・」

「・・・」

スタ、スタ、スタ・・・ 箒姉さんは私の横をあっさり通り過ぎて行った。

・・・ま、またお話できなかった。

「あー、うん。元気出せよ楓」

「一夏さん・・・」

軽く落ち込んでいると、一夏さんがポンツと肩を叩いて慰めてくれた。

「俺達これから剣道場の方に行くんだけど、一緒に行くか？」

「あー・・・でも私、先生に呼ばれてまして。その前に箒姉さんとお話したかったのに・・・」

「そ、そっか・・・ま、まあ、たぶん箒も照れてるだけだから、すぐに話せるようになるって、な？」

「はい・・・」

照れてる・・・照れてるのかなあ・・・？

まあ、もう少し頑張ってみようと思う。

それに・・・今の、たぶん・・・。

S i d e 織斑 千冬

第3アリーナ、来週の月曜日には一夏とオルコットが対戦することになる場所だ。

とは言え今日は、別の目的でここを使用させてもらう。

その目的とは、篠ノ之楓の実技試験だ。

本来ならあり得ない処置だが、政府の意向で許可が下りた。

おそらく、「篠ノ之束の妹」を掌中に収める好機だと思っているのだろう。

。 箒と楓、あの双子を入学させて何を企んでいるのかは知らんが・・・

だが下手な手出しができないことも、わかっている。

「束が黙っているはずも無いからな・・・」

「・・・？ 何か言いましたか？」

「ああ、いや、何でも無い」

・・・アレの姉、篠ノ之箒がIS学園に入ったのは、他に束が納得できる場所が無かったからだ。

政府や委員会による度重なる詰問と転居、それによってアレが受けた精神的な苦痛は相当な物だったろう。

そしてあるルートからそれを知った束は・・・。

篠ノ之箒の獲得に関係しようとした企業・組織を、1日で全て壊滅させた。

それも一滴の血も流さず、死者も出さず・・・ただ、物理的に壊滅させた。

その方法は、誰にもわからない。

それで失われたデータと機材は、金額にすると兆を軽く超える。

もちろん、ドル換算でな。

・・・私がいるIS学園だけが、確保できてしかも安全な場所だった。

「・・・山田先生、準備は？」

「あ、大丈夫です」

アリーナの中央に、1機のISがいる。

それに乗っているのは山田先生で、彼女は元々入試の教官だった。

加えて言えば日本の代表候補生だったわけだが・・・それは良いな。

乗っている機体は『ラファール・リヴァイヴ』・・・フランス製のISだ。

ネイビーカラーをした4枚の多方向加速推進翼が特徴的で、量産型ISの中では世界第3位のシェアを誇る機体、操縦のしやすさと汎用性の高さが売りの第2世代IS。

「専用機が相手だと、ちょっとキツいかもですけどね」

「冗談を、山田先生なら専用機持ちのガキに負けはしませんよ」

実際、山田先生は強い。

私だって油断すれば負ける・・・まあ、ここ数年はISに乗っていない私が言うのも、おこがましいが。

その山田先生がこれから模擬戦・・・試験をするのは、篠ノ之楓とその専用機。

スペックや機体特性などは束の送りつけたデータで見ているし、コアも束所有の登録済の物。

書類申請上は、「試験機」として篠ノ乃楓に「貸与」と言う形になっている。

国籍をどこにするか、一夏の専用機と合わせて国際間で話し合われているが・・・。

・・・下手なことをすると束に制裁されかねないから、話し合いは進んでいないのが実情だが。

「お待たせしましたっ」

「遅い！ 5分前行動が基本だと教えなかったか！」

「す、すみません！！」

指定した時間の少し前に、受験者・・・つまり、篠ノ乃楓がやって来た。

そのまま私達の前に来て、背筋を伸ばして立つ。
心無し、緊張しているようにも見える。

・・・当たり前だが、2人の姉のどちらとも違う反応だな。

「これより試験を行う。基本的にはISを動かせば良いが・・・
一応、こちらの山田先生と模擬戦をして貰う」
「よろしく願いますね」
「は、はいっ、願います！」

物凄い勢いで頭を下げる・・・その後、山田先生とペコペコし合っ
て止まらなくなったが。
まあ・・・とにかく、見せて貰おうか。

「では、ISを起動しろ・・・お前の姉には許可を取ってある、安
心してやると良い」
「・・・はい」

私の言葉に、篠ノ之楓は左手の中指に嵌めていた黒い指輪を撫でた。
それが、待機状態らしい。
専用機として「最適化」したISは、量子化して形態を変える。
基本はアクセサリーの形になる・・・ああ言う、指輪とかにな。

「・・・おいで、『黒叢』」

小さな眩き、同時に操縦者の身体が光の粒子に包まれる。

現れるのは、インフィニット・ストラトス・・・IS。
それは・・・。

S i d e 篠ノ之 束 たばね

んー・・・暇だなあ、楓ちゃんもいなくなっちゃったしなー。
引越しもとりあえず終わったし、篝ちゃんや楓ちゃんやいつくん
にちよっかい出しそうな所も全部潰しちゃったしなー。

ちーちゃんが怒るから、死亡者はゼロ。
え、どうやったかって・・・さあ、覚えて無いや。
いーじゃん、どーでも。

「楓ちゃんは今頃、とつくのとつくにあそこについてるよねー、良
いなあ、篝ちゃんといっぱいお話できてるんだろっなー」

篝ちゃんはお姉ちゃんに冷たいって言うか、嫌ってるからね。
何せ、電話もかかってきたことも無いし、かけても無視だしね。

その時、束さんの携帯電話からゴッドファ ザーのテーマが鳴り響
く！

こゝこの着信音は・・・ちーちゃん！

東さんはもう、それはそれは俊敏に携帯電話を取ったね！

「もすもす終日^{ひねもす}ー、東さんだよーんっ！」

そして、出た瞬間に切られた、ぷちっと。

あーん、待つて待つて、ちーちゃん待つて！

そう念じたら、再びゴッ ファーザーのテーマ、ちーちゃん愛してるう

「やふー、この世一の天才、東・・・いやいや、切らないで切らないで・・・」

その後、ちーちゃんに5分くらい怒られた。

うふふ、ちーちゃんだけだよ、私を怒れるの。

他の人なら、明日には一文無しになってるんだから。

「それでそれで、何かなちーちゃ・・・え？ 何だアレはって、何の話？」

はあ、はあはあゝ、なるほど、楓ちゃんのIS見たんだ？

ああ、うん、まあ、アレは確かに半分くらい私が作ったんだけどね。基本設計は楓ちゃんだよ、私はお姉ちゃんだから、ちょちょゝっと

手伝っただけで。

「アレはねえ、そうだねえ、何と言うか・・・うん、他のISとはコンセプトがね、違うんだよ」

何と言っても、後から生まれる2機とセットのつもりでいろいろしたからさあ。

アレ単体だと、いろいろと変なことになるんだよね、うん。

まあ、天才の束さんが、弟子で助手で可愛い末の妹な楓ちゃんのために作ったからね、他のとは千味くらい違うよね。

「ああ、『^{ひやくしき}白式』？ モチロン大丈夫・・・」

クルツ、と座つてた椅子を反対側に回して、「それ」を見上げる。
そこには・・・「白」がある。

束さんがいっくんのために丹精込めて作ってあげたISが・・・。

「来週の月曜日には、ちゃんと届けてあげるからね、ちーちゃん」
「

束さんをお願い事ができるのは、この世で4人だけなんだから。
うーん、サービス精神旺盛だね、流石は天才の束さんだねっ。

第2話：「クラス代表決定戦・前編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、どうにか学生生活も軌道に乗って来た・・・と思う、楓です。

そもそも学生生活って何をすれば良いのかさっぱりだけど、とりあえずお友達を作る所から初めて見ました。

今日は、この世界でのISの運用に関する国際的な取り決めなどについて説明させて貰いますね。束お姉ちゃんはバラまくばかりで後は放置だから・・・。

ある事件を境に、ISは現行兵器を上回る機動兵器としてデビュー、各国はこの新たな脅威の扱いについて話し合うことになります。

まあ、束お姉ちゃんが日本人だったんで、基本的に世界中から日本が叩かれていたようです。

長いようで短い話し合いの後に締結されたのが「アラスカ条約」。

アラスカ条約：

正式名称は「IS運用協定」、通称「IS条約」。467のISコアを主要国に「平等に」分配することや技術・情報開示、関連製品取引の規制などが取り決められてます。軍事転用の「禁止」も盛り込まれてますけど、誰も守ってません。IS学園の設置についてもここで明記されています。各国のIS保有数や動向を監視する機関としては国際IS委員会がありますけど、これも結局は主要国のクラブです。

モンド・グロツソ：

主要21カ国・地域が参加するISの対戦の世界大会。各部門の優

勝者は「ヴァルキリー」、総合優勝者は「ブリュンヒルデ」と呼ばれて称えられます。千冬姉様はどちらも持ってます、凄いですよね！。

篠ノ之 楓：

・・・とまあ、こんな感じです。

その他、いろいろ細かい規定とかありますけど・・・ほとんどあつて無いような規定ですし、そもそもISはブラックボックスが大きいので。

・・・もしかしたら、東お姉ちゃんが面倒がって適当に組んだシステムかもしれないし。

篠ノ之 束：

むふ？ そんなこと言うお口はぐ、こつだぐ

篠ノ之 楓：

あばばば・・・っ

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（前書き）

もしかしたら、楓VS山田先生な展開を期待しておられた方。
残念、まだ引っ張ります（申し訳ありません）。
では、どうぞ。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

第3話：「クラス代表決定戦・後編」

S i d e 織斑 一夏

入学式のあった次の週の、月曜日。
つまりは、俺とセシリアの対戦の日だ。
ただし、大きな問題が2つある。

「なあ、箒……ISのことを教えてくれると言っのはどうなったんだ？」

「……」

「……目を逸らすなよ」

1つは、箒が俺に剣道の稽古しかしてくれなかったことだ。
いや、もちろんありがたい……試合の感覚を取り戻すのも大事だ
つてのはわかる。

何しろ中学時代は家計を助けようと それでも生活費の9割は
千冬姉が出してたけど 3年間、アルバイト生活で剣道なんて
して無かったからな。

だけど問題はこの1週間、剣道しかなかったことだ。

個人的に教科書を読んだり山田先生のレクチャーを受けたりはした
物の、それ以外はさっぱり。

楓を頼ってみたこともあるが、「箒姉さんに教えて貰う約束をしたでしょ」と突っぱねられた。

おかげで毎日毎日放課後3時間、みっちり箒と剣道の日々だった。

「し、仕方が無いだろう、お前のISだってまだ来てないんだから」「いや、それでも基礎とか知識とか、いろいろあっただろ・・・？」

そしてもう1つ、当日だと言うのに俺のISがまだ来ていない。そう、まだ来ていない。

・・・大事なことから、2回言った。

一応、千冬姉に呼ばれた通り、第3アリーナのAピットに来たんだけど・・・。

「お、織斑君織斑君織斑君ッ！」

不意に、3回も呼ばれた。

顔を上げれば、転びそうな足取りでこちらに駆けて来る山田先生。

千冬姉は歩いてるのに、どうして走ってる山田先生と並んでこっちに来れるんだろう。

「山田先生・・・と、千冬ねって、痛あつ!？」

「学校では織斑先生と呼べと言っている。いい加減に学習しろ、さもなければ死ね」

出席簿で俺を殴るのは、もちろん千冬姉。

実の姉からの温かい言葉に、俺は涙が出そうだった。

俺の周りの女性は、どうしてこんな・・・それとも、女尊男卑の時代の影響か？

いや、時代のせいにするのは良く無いな、うん。

「そ、それですねっ、来ました、織斑君の専用IS！ ピットに搬入してあります！」

「織斑、さつさと準備をしろ・・・アリーナの使用時間は限られている。ぶつつけ本番でモノにしろ」

「男子たる者、この程度の障害は軽く乗り越えて見せろ、一夏」

山田先生、千冬姉、箒がそれぞれ俺を激励してくれる・・・激励、だよな？

でも俺、何をしたら良いのかさっぱりわからないんだが。

プシュッ・・・空気の抜けるような音共に、ピットへ出る扉が開く。山田先生に背中を押されて、たたらを踏みながら中へ。

そこにいたのは、『白い騎士』だった。

真っ白な、純白の、飾り気のない無骨な鎧。

それが第一印象、装甲の一部が開いていなければ、乗り物だとは気付かなかったかもしれない。

真っ白なそれは、まるで俺を待っているかのように膝をついていた。これが、俺の。

「・・・これが？」

「はい、織斑君の専用機・・・『ひまへし白式』です！」

白一式と書いて、『ひまへし白式』。

どうしてだろう・・・このISがまるで、ずっと俺を待ってたみたいに感じるのは。

これが、俺の・・・と、1歩近付いたその時、誰かが『ひまへし白式』の陰から出て来た。
それは・・・。

「どうも、箒さん、一夏さん」

「・・・楓!？」

あ、箒とハモった。

そこにいたのは、箒と同じ顔の女子だった。

髪は箒と違って短く、表情も厳しさよりも緩さが目立つ。

ミニのスカートとオーバーハイの靴下の間の肌色が、眩しい。

・・・って言うか、気のせいで無ければ、箒が楓の名前を呼ぶのを初めて聞いた気がする。

そのせいなのかどうなのか、楓は箒を見ると嬉しそうにっこりと微笑んだ。

「背中を預けるように、ああそうだ、座る感じで良い。後は勝手にシステムが最適化してくれる」

「あ、ああ・・・」

千冬姉様の言葉に従って、一夏さんが『びやへんしき白式』に乗る。

カシュッ・・・渴いた音がして、一夏さんの身体がISと「融合」する。

操縦者とISの「意識」が繋がる瞬間で、人によっては違和感を感じることもあるけれど。

どうやら、一夏さんは大丈夫みたい。

私にはわからないけど、一夏さんは今『びやへんしき白式』から膨大な情報を得ているはず。

操縦方法、性能、特製、装備、活動時間、エネルギー残量、出力限界、そして「敵」の情報。

ISは操縦者が必要とするあらゆることを教えてくれる、パートナー相棒として。

「ISのハイパーセンサーは、問題無く動いているようだな。一夏、気分は悪くないか？」

「・・・大丈夫、千冬姉、行ける」

「・・・そうか」

千冬姉様と一夏さんが、おそらくは身内にしかわからないだろう視線の交わり方をする。

そう言うの、素敵だと思う。

私が箒姉さんを見ても・・・あ、また逸らされた。

割とシヨック・・・。

「ところで、楓はさつきから何をしてるんだ・・・？」

「見てわからないのか、馬鹿者。お前のために『フォーマット初期化』と『ファイッテ最適化^{インク}』をしてるんだよ・・・篠ノ之妹、間に合いそうか？」

「時間が足りません」

千冬姉様の声には、きっぱりと答える。

答えないと後で何をされるか・・・まあ、出席簿の一撃だけだと思うけど。

そんな私の前には、空間投影式のディスプレイとキーボード、それぞれ6枚と2枚。

キーボードの上で指先を躍らせながら行うのは、『ひやくしき白式』の^{フォーマット}初期化作業。

このISを本当の意味で一夏さん専用にするためには、まずコアから前の機体の情報を消して、さらに一夏さんの情報を入力しなければならぬ。

1秒ごとに、ソフトウェアとハードウェアが一夏さん専用のそれに微修正されていく。

普通、何時間もかけて少しずつやる作業なのだけれど・・・。

「え、ええと・・・ありがとう？　でも何で楓が？」

「コイツは整備科志望だからな・・・本当は専用機には整備チームがつくが、お前にはまだ無い。手伝って貰えるだけありがたいと思えよ」

「な、なるほど」

・・・2つのキーボードを同時に扱って、どうにか『フォーマット初期化』を最終段階まで進める。

同時に一夏さんの情報の入力を初めて『フィッティング最適化』。
時間が無いから、いろいろな作業を一度に済ませないと・・・。

・・・ハイパーセンサー接続、最適化完了、操縦者視界良好、クリアー。

機体制御システムオンライン、姿勢保持システム及び各部推進装置グラフィティ・ヘットの偏向重力推進角錐度数をアトランダム設定して最適数値でそれぞれ自動固定、加減速補助システム作動・・・バック・イナーシャル・キャンセラーP I C 関連システム問題無し。

登録武装・・・あれ？　一個だけか、じゃ良いや。

推進ユニット・コントロール・システム最適化、エネルギー・バイアス・オペレーティング・システム及びシールド・エネルギー制御システム更新・再構築・・・それぞれ30秒以内に再実行、仮想試験結果を繁栄しつつ数値変更・・・。

「・・・凄い・・・」

山田先生の声、でも私はそんなに凄く無い。

束お姉ちゃんなら、1分もあればこれくらいの作業は終わらせてる。でも私は搬入の時点から3分経つても、『初期化^{フォーマット}』しかできてない。まだ半分も……。

「……篠ノ之妹、もう良い。後は一夏が試合中に何とかするだろう。できなければ負けるだけだ」

「ああ、サンキューな楓」

「……わかりました」

『白式^{ごまへつ}』からコードやケーブルを抜いて、接続を解除する。
後は『白式^{びやくしき}』が自動で『最適化^{フィットイング}』する、でも試合終了まで間に合うかどうかはわからない。

……悔しい、凄く中途半端な仕事をした気分。
でも一夏さんは、凄く落ち着いた笑顔でお礼を言ってくれる。
それから、心配そうに一夏さんを見ていた篝姉さんの方を向いて……。

「篝」

「な、なんだ？」

「……行ってくる」

「……ああ」

一夏さんの言葉に、篝姉さんが少しだけ微笑む。

・・・それに私が少しだけ驚いている間に、一夏さんはピットの会場側出口の方へISを進ませる。
重い音を響かせて、『白式^{びやくしき}』が歩く。

・・・良かった、ちゃんと動く。
でもあのシステム構築様式、確か東お姉ちゃんの・・・。

「・・・勝つてこい」

祈るような篝姉さんの声に、一夏さんは篝姉さんを見ずに手を上げるだけで応える。

おお、良く分からないけど、通じ合ってる感がある。
そして、一夏さんはゲートの外へと・・・。

Side セシリア・オルコット

・・・私の母は、厳しくて強い人でしたわ。
女尊男卑の風潮が世に広まるよりも前から、いくつもの会社を営
んで成功した人。
家柄でも能力でも母に劣っていた父は、いつも母の顔色を窺ってい
た・・・。

そう、だから「男なんて」そんなもの。

そんな2人の間の愛情が続くはずもなく、母はいつしか父を避けるようになっ ていきました。

でもあの日・・・3年前、死者100人を数えた越境鉄道事故で2人が亡くなった時。

その日だけは、どうしてか2人一緒に・・・でもその理由を考える間もありませんでした。

私は両親の財産を狙う下種共から家を、両親の遺したものを守るため、勉強の日々を過ごし。

そして・・・。

「・・・『ブルー・ティアーズ』」

小さな声で囁くのは、私の身体を覆う青の鎧の名前。

鮮やかな青、背中には特徴的なフィン・アーマーを備えた蒼穹の騎士^{アイ}。

これが私の、一つの結果ですわ。

IS適正テストで世界でも有数のランク・・・「A+」を出して。

政府から国籍保持のための好条件が出されて、家を守るために受け入れました。

そして第3世代試験機のこのISの専属操縦者になり、稼働データと戦闘実績を得るために日本へ。

だから彼と戦うのは、そのためでもありますの。

「個人的に気に入らないと言う気持ちも、まあ、ありますけど・・・」

何しろ、男だと言うだけで専用機まで与えられるのですから。

私が数年かけて　それでも短い方だと言うのに　手に入れたものを、彼は数日で。

男だと言う、ただそれだけの理由で。

・・・叩き潰して差し上げますわ。

私がそんなことを考えた時、ようやく彼がピット・ゲートから姿を現しましたわ。

私の目の前にディスプレイが浮かび、『ブルー・ティアーズ』が彼の・・・織斑一夏のISの情報を教えてくれます。

ありがとう、『ブルー・ティアーズ』・・・でも大丈夫、私と貴女が負けるはずがありませんわ。

「最後のチャンスを差し上げますわ」

「・・・チャンスって？」

「私と『ブルー・ティアーズ』が、一方的な勝利を得るのは自明の理。今、ここで謝罪すると言うのなら、許してあげないこともなくつてよ？」

<射撃コマンドを展開、セーフティロック解除>

頭の中に響くのは『ブルー・ティアーズ』の声、同時に左目の部分にターゲット・ロック・システムが展開、右腕部分に展開されている主力レーザーライフル「スターライトmkⅠⅠⅠ」にエネルギーが充填されます。

そして同時に、試合開始の鐘が鳴り響きます。

彼も気付いたのでしょうか、身構える。

あの白いISの性能自体は、それなりのようですね。
でも……。

「……そう言うのは、チャンスとは言わないな」

「あら、そう？ 残念ですわ、それなら……」

< ターゲット・ロック
標的確認、 射撃開始まで3秒、 2、 1…… >

……でも本人の能力は、どうかしらね！

「……お別れですわね!!」

トリガーを引いて、甲高い独特の射撃音が響く。
同時に、私の『ブルー・ティアーズ』から最初の射撃ショットが放たれました。

「うおおおっ!？」

いきなり撃ってきやがった!

いや、もう試合開始の鐘は鳴ってるんだから、卑怯でも何でもない。ただ、俺がボンヤリとしてただけだ。

一応、ギリギリでかわしたけど・・・俺の手柄でも何でも無く、『
白式』のオートガードが俺を守ってくれたただけ。
オートガードだから、俺の意思とは関係無く、『
白式』が動いただけ。
つまり、俺が『
白式』の反応についてこれて無い・・・!
と言うか、動かし方だって碌にわからん!

<ダメージ46、シールドエネルギー残量521>

頭の中に『
白式』の声が響く、ちなみに今やってるみたいなIS同士の戦いは、「ISバトル」と言うスポーツとして世間に認知されてる。

まあ、学園では普通に模擬戦って言うんだけど。

「ISバトル」と言うこのスポーツは、相手のシールドエネルギー・

ヒットポイント

・まあ、HPみたいな物をゼロにすれば勝ちだ。

エネルギーがゼロになると実体（本体）にダメージを通せる、それで勝ちつてわけだ。

後、ISには「絶対防御」って言うシステムがあつて、最低限操縦者が死なないようになってる。

・死ぬとか、縁起でも無いけどな。

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと『ブルー・ティアーズ』の奏でる円舞曲で――！」

声と同時に、セシリアの射撃が雨のように降り注いでくる。

いくらオートガードって言っても、全部を凌げるわけじゃない。

しかも相手の射撃が的確なもんだから、ガンガン当たる……直撃だ、しかも連続。

と言うか、避け方がわからん。

おかげで、『白式』も警戒音を鳴らしっぱなしだ。

上へ避けても左に飛んでも……200メートルもあるアリーナなのに、どこへ飛んでもセシリアの射撃が俺を襲ってくる。

……アイツ、凄いな。

「……って、感心ばかりしてらんねえ……何か、武器は」

丸腰じゃ無理だ、『白式』に武器の一覧を出すように頼む。

……って、1個だけかよ！？

ええい・・・ままよ！

右手を掲げて、量子化していた武器を実体化させる。

束さんが基礎理論を構築したって言うこの量子化・物質化のシステム・・・いったいどう言う理屈なのか、さっぱりだ。

だけどそのシステムが、俺に武器を・・・1本の「刀」を与えてくれる。

片刃の長刀・・・刃渡り1・6メートル。

「中距離射撃型の私達に、近距離格闘装備で挑もうだなんて・・・笑止ですわね！」

そして、セシリアの射撃。

機体を無理矢理捻って、かわす・・・でも彼我の距離は絶望的、27メートル。

俺の攻撃射程にセシリアを捉えるにはその距離を、しかも弾幕の中を潜らなきゃいけない。

今にして思えば最初の一撃は挑発でも奇襲でも無く、距離を広げるための物だったのかもしれない。

「・・・やってやるさ」

千冬姉や箒、それに『初期化』フォーマットしてくれた楓、機体搬入の手続きをしてくれた山田先生に・・・無様な格好は、晒せないよな。
だから、やってやるさ・・・この『白式』びやくしきで！

一夏が、戦っている。

初めてのISバトルで代表候補生との戦い、予想通りと言うか、苦戦だった。

オルコットの射程距離の長さに、近接用の装備しか持たない一夏は翻弄されている。

特に、オルコットの機体から放たれている4機のビットのような物が厄介だ。

青いISの背中についていたフィンが分離して、それぞれ独立したビットになっている。

それぞれが独立軌道で動く銃器のような物で、先端から特殊なレーザーを放つ。

「何だ、アレは・・・?」

「イギリスの第3世代装備『ブルー・ティアーズ』。オルコットさんのISと同じ名前なのは、あの兵器を積んだ実戦投入1号機だから、だとか」

私の呟きに答えたのは、楓だ。

私は千冬さん達と一緒に、Aピットからリアルタイムで一夏の戦い

を観戦している。

目の前の大きなモニターには、第3アリーナで行われている試合が映されている。

私の立ち位置は千冬さんと山田先生の後ろで、そして私の左隣に楓がいる。

楓・・・数年ぶりに会った私の双子の妹。

楓は空間投影式のディスプレイとキーボードを1枚ずつ展開させたまま、一夏の試合をデータ面で分析しているようだった。

その姿は・・・嫌でも、あの人を思わせる。

「見た限りにおいて『ブルー・ティアーズ』 ややこしいので

以下ビット は相手の死角からの全方位オールレンジ攻撃が可能、まだ稼働実験段階の「BT兵器」と呼ばれる兵装だと思う。展開前にはスラスターとして使用していたようなので、ある程度の汎用性も備えているみたいだね」

楓の声が続く間にも、画面の中の一夏は追い詰められている。

上下左右に展開したビットがビームを放ち、一夏をオルコットのライフルの照準地点に追い込む。

その繰り返しだ、気の休まる暇も無い。

一夏はIS稼働時間20分とは思えない身のこなしで、ビットの攻撃を回避、防御し続けている。

だが、このままでは・・・。

「・・・一方で『白式』^{びやくしき}は現在、近接用のブレードのみを装備。あれはまさに敵を殴りつけないと効果の無いタイプで・・・懐に飛び込めない限り一夏さんに勝機は」
「っ・・・一夏が負けるわけが無いだろう!」

思わず、怒鳴った。

直後に後悔する、何をやっているんだ、私は・・・。

「う・・・ごめんなさい、姉さん」
「・・・いや」

頭を振って、苛立たしい気持ちを落ちつけようと親指の爪を噛む。
この1週間、楓のことを避けていたから・・・これが、数年ぶりの会話と言つことになる。

数年ぶりの会話が、これが。

だが、他に何を喋れば良いのかわからない。
私と違って、あの人と一緒にいた楓。

・・・憎んでいるわけでも、嫉んでいるわけでも無い。
だけど・・・何を言えば良いのか、わからない。

「一夏・・・!」

画面の中では、一夏がオルコットの弾幕を潜り抜けて、ようやく接敵した所だった。

ぎゅっ・・・口元に持って行っていた手を、無意識に握り込む。

一夏・・・。

S i d e 織斑 千冬

後ろで小娘共が騒いでいるようだが、そんなことは知らん。
姉妹の問題に口を出す程、私はお節焼きじゃない。

「はああ・・・凄いですね、織斑君。とてもISを動かすのが2回目とは思えません」

モニター前の椅子に座っている山田先生が、感嘆したように呟く。
確かに、画面の中の一夏は素人とは思えない程の健闘ぶりを示している。

初陣、しかも相手は代表候補生だと言うのに。

画面の中の一夏が、オルコットのビットの1機を叩き斬った。

それは、オルコットのビットの弱点を看破したが故の結果だ。
あのビットは、オルコットの射撃と同時に動かせない。

つまり自動じゃない……それを逆手にとって、一夏はわざと隙を作ってビットを誘導、迎撃する。

そう言っている間に、2機目、3機目と墮としていく……。

「……馬鹿者め、浮かれているな」

「え……どうしてわかるんですか？」

「さっきから左手を閉じたり開いたりしているだろう……昔からのクセだ」

「へええ……流石はお姉さんですね、そんなあいたたたたっ！？」

私をからかおうとした山田先生にヘッドロックをかけつつ、私は画面を注視する。

そこには、4機目……「最後の」ビットを墮とそうとしている一夏が映っている。

とは言え、ダメージは深刻……にも関わらず、その機動性は上昇しているように見える。

普通、ダメージを受ければ機動性は落ちるはずだが……。

「……直前の『最適化』フィッティング作業が、ここに来て生きてきたか」

あの機体は元々、倉持技研と言う日本のIS企業が開発していたが、
・色々な理由で、放棄された。
そしてそれを束が引き取って、完成させた。
……前代未聞の第4世代ISとして。

各国が第3世代の開発に躍起になっている所に第4世代のIS、公表などできない。

アレの整備担当として篠ノ之妹を呼んだのは、他にできる人間がいなかったからだ。

加えて言えば、『びやくしき白式』のコアに接続できるのが私と一夏、篠ノ之かえで姉・・そして篠ノ之妹だけだった。

もちろん、開発者である束は例外とした場合だが。

「・・・束の、弟子か」

先の束との電話で、篠ノ之妹かえでのことを少しだが聞いた。

最も、束の言っていることは8割は意味不明だが・・・。

「・・・何だ!？」

篠ノ之姉の声に、思考を現実に戻す。

画面の中で、一夏が4機目のビットを墮とした時、「それ」は起こった。

・・・機体に救われるか、馬鹿者が。

< 『フィッティング最適化』 終了、確認ボタンを押してください >

な、何だ・・・？

セシリアの最後のビットを刀で斬り落とした後、いきなり『ひゃくしき白式』が話しかけて来た。

目の前のディスプレイに浮かんだ「確認」を押すと、膨大なデータが意識に直接流れ込んでくる。

刹那、俺のISが量子化して・・・直後、再び実体化する。

中世の無骨な鎧のようだったそれは、形がかなり変わっていた。

より曲線的に、よりシャープに・・・そして、直感的に理解する。

これでこのISは、「俺専用」になったと。

ファースト・シフト

「一次移行・・・じゃあ、今までは初期設定だったって言うの!？」

「ふぁー・・・何だつて？」

セシリアが驚いているみたいだけど、俺には細かいことはわからない。

右手の刀を見ると、それもまた形状が変わっていた。

「・・・『ゆきひら・にがた雪片式型』？」

そこには昔、千冬姉さんが現役だった頃の動画で見た、あの刀があ

った。

姉さんの、刀。

刀に形成した……形名。

刀と言うより反りの深い「太刀」、鎬に刻まれた溝からは工業的な粒子が溢れている。

……ああ、そうだよな。

俺は本当に、最高の姉さんを持ったよ。

元「世界最強」……誰よりも綺麗で強い、世界一の姉さんだ。

だから千冬姉が誇れるとまでは言わなくても……恥じることの無い、そんな弟でいたいと願う。

「だから」

チャキツ……新しくなった刀……いや、太刀を両手で持って、下段に構える。

「……『白式』、距離は？」

<16メートルです>

……遠いな、だけどビットは全部落とした。
後はライフルをかわしながら……飛び込む！

「……ぜああああああっ！」

「くっ……面倒ですわ！」

距離を開こうとするセシリア、縮めようとする俺。

これまでの動きが嘘のように、『ひやくしき白式』を思い通りに動かせる。

追いかけては唐突に終わり、ライフルの銃口を蹴りつけて外し、太刀を大上段から振り……。

「お生憎様」

次の瞬間、セシリアの機体のスカート部分が開く。

開いたそこから現れたのは、2つの突起物……つまり。

「『ブルー・ティアーズ』は……6機ありましてよ！」

放たれるのはビームじゃない、2発のミサイル

！

「……！」

だけど、見える。

ミサイルの軌道、どこを狙うのか……頭が判断するのと同時に、機体が動く。

思った通りに、斜めにロール移動。

1 発目、右肩の装甲を掠めつつも回避。

2 発目・・・斬る！

ガンッ・・・両手に鈍い重みを感じると同時に、爆発の衝撃が俺を襲う。

<ダメージ66、シールドエネルギー残量

>

『白式』^{びやくしき}の声も無視して、爆煙の中を直進する。

黒煙を抜けた際には、焦りの色を浮かべたセシリアの顔があった。

・・・獲る！！

「うっおおおおおおおおおおおおっ！！」

下段から上段へ、逆袈裟払い。

『白式』^{びやくしき}から太刀にエネルギーが供給されていくのを感じる、太刀が熱い。

『雪片』^{ゆきひら}の刀身が輝き、俺はその輝きに導かれるように。

・・・太刀を、振り切った。
そして。

Side 篠ノ之 楓

「大馬鹿者め、武器の特性もわからないくせに無理に使うからそうなるんだ」

「大馬鹿者って・・・馬鹿者から嫌な方向にランクアップしないでくれよ・・・」

「何か文句があるのか？」

「・・・無いです」

試合の後、一夏さんは千冬姉様にこつてりと絞られていた。

自分の武器を中途半端に使いやがって・・・と言う内容にも聞こえるけれど、たぶん照れ隠し。

自分の武器を弟が継いでくれたことが、実は物凄く嬉し・・・。

「・・・篠ノ之妹？」

「な、何でも無いデス！」

一夏さんを絞っている千冬姉様の標的が私に移りかけたので、慌て思考を止める。

と言うか何、相手の思考が読めるの・・・？

いや、それ以前に篠ノ之妹って。

東お姉ちゃんから見れば、篠ノ之妹って2人いるよ？

まあ、良いや・・・今はとりあえず、『^{びやへつぎ}白式』の方に興味あるし。
ブウンツ・・・と私の目の前に上下4枚、合計8枚の空中投影型デ
イスプレイが浮かぶ。

そこには、一夏さんの専用IS『^{びやへつぎ}白式』の『^{フィットینگ}最適化』後のデータが
映しだされる。

「うーん、やっぱりちゃんとパーソナライズした方が・・・」

千冬姉様に聞いた話だと、これを作ったのは東お姉ちゃん。

どつりで『^{フォーメット}初期化』しやすいと思った、お姉ちゃんは私がやりやす
いようにシステムを組んでくれてたんだね・・・えへ、何か嬉しい
な。

東お姉ちゃんの作ったISを、私が整備。

うん、美しい。

これが箒姉さんの専用機だった日には、きつともつと楽しい
よね。

東お姉ちゃんが作って、私が調整して、箒姉さんが動かす。
・・・理想だね。

「篠ノ之妹、そろそろ良いか」

「あ、はい」

千冬姉様に言われて、『^{びやへつぎ}白式』との接続を切る。
それから一夏さんが『^{びやへつぎ}白式』を待機状態にして、白いガントレット

の形になって一夏さんの手首に納まる。

待機状態になったISは、操縦者が望めばその場ですぐに展開できる。

でもここはIS学園、当然のように電話帳並の規則の本がある。

一夏さんは、山田先生からそれを青い顔で受け取っていた。

「・・・何にしても、今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

締め言葉は、やっぱり織斑先生。

と言うわけで、今日は一件落着・・・。

「・・・あ」

ふと視線に気が付く、それは篝姉さんの物だった。
いつもと同じ、鋭い視線。

何と言うかこの1週間、上手く話せなかったから・・・ちょっと緊張。

「・・・ISの」

「う、うん・・・」

「ISの整備、姉さんに習ったのか・・・？」

「あ、うん」

「・・・そうか」

それだけ。

それだけ言って、箒さんは一夏さんを連れてピットから出て行った。

・・・ほんの、一言だけ。

たった数秒間だけだけど・・・箒さんと、お話ができた。

それが嬉しくて、私はその場で歓声を上げた。

・・・直後、千冬姉様にはたかれた。

Side 篠ノ之 箒

・・・この感情は、何だろうな。

楓は束姉さんにISのことを教えてもらって、それで一夏のISの『フォーマット初期化』をした。

羨ましい・・・の、だろうか、私は。

まさか、そんなはずは無い。

ただ、私は・・・。

「・・・なあ、箒」

「・・・」

「おい・・・無視すんなよ、篤さん」

一夏の声に、ふと立ち止まる。

振り向くと、何だかバツの悪そうな顔をした一夏がいた。

「・・・勝てなかったな」

「ぐあ」

私の言葉に軽く呻いて、そしてかなり落ち込んだような表情を見せる一夏。

その姿を見ると、ささくれ立った心が少しだけ安らかになるのを感じた。

我ながらどうかとも思うが、一夏と一緒にいると安らぐ。

・・・ど、同門の人間が傍にいと落ち着くと言う、それだけの意味だ。

それ以上の意味は無い、無いつたら無いからな！

心の中で自己完結した後、再び歩き始める。

当然、一夏もついてくる・・・。

・・・と、当然と言うのは、行く場所が同じだからと言う意味で、共にいるのが当然と言う意味では無いぞ。

「い、一夏」

「ん、何だ？」

「く、悔しかったか・・・？ 勝てなくて」

「そりゃ・・・まあ」

どこか沈んだような一夏の声に、私は少しだけ目を閉じる。

思い出すのは、幼い頃の剣道場。

中学時代は剣を握っていなかったと言う一夏は、あの頃とは違つて物凄く弱くなった。

この1週間、剣を合わせて・・・私から1本も取れなかった程に。

だけど、根本の部分は変わっていない。

今の言葉でそれがわかつて、とても嬉しかった。

・・・楓と話せ話せ言うのは、正直アレだが。

「・・・なら、明日からはISの訓練もいれないとな」

「あ、教えてくれるのか？」

「そう言っただろう」

いつかの会話を繰り返す。

「い、一夏が私にどうしても教えてほしいと言っのならな、仕方無い」

「ああ、そうだな、是非頼むよ」

「・・・う、うむ。では明日からは必ず放課後を空けておくのだぞ、良いな？」

「おう」

・・・明日から、放課後はずっと一夏と2人きり。
い、いや、単にISの訓練をするだけだ、うん、それ以上の他意は
無いぞ！

私は単純に、出来ない同門にいろいろと教えてやろうと言っただけだ。
・・・それだけだからな！

「か、勘違いするなよ、一夏！」
「え、お、おうっ！」

・・・まあ。
とにかく今日は、頑張ったな。
・・・一夏・・・。

S i d e セシリア・オルコット

シャワールームの中で熱いお湯に打たれながら、私は今日の試合に
ついて反芻しておりました。

今日の試合・・・織斑一夏とそのISとの試合を。
私が・・・私と『ブルー・ティアーズ』が・・・。

「・・・一撃を、喰らうだなんて・・・」

今日専用機を持ったばかりの男に、代表候補生であるこの私が、最後の一撃は、いったい何ですの・・・？
私の機体のバリアを無効化して、直接ダメージを与えるなんて、そこで相手のエネルギーが切れましたから、それ以上の追撃はありませんでしたけど。

とは言え、どうして彼の機体が直後にエネルギー切れを起こしたのかもわかりませんわ。
私に一撃を与えた時には、まだ残っていたはずだけど・・・。
・・・そのおかげで機体のダメージが最小限に留められたのですから、不幸中の幸いなのでしょうけど。
でも、もしエネルギー切れを起こしていなかったら・・・。

「・・・結果的には、私の勝利・・・とは言え・・・」

でも昨日今日にISを動かした素人、まともな訓練も受けていない相手。

それに、一撃を許した。

直後に彼のISがエネルギー切れを起こさなければ、ゼロ距離で撃ち落としていたとは言え。

ビットも破壊されて、無様にも程がありますわ。

・・・何なんですの、あの男！

「・・・織斑、一夏」

彼の・・・織斑一夏のことを、思い出す。
最初から女である私に媚びようとせず、むしろ反発して見せた彼。
母の顔を窺ってばかりいた父とは、まったく違いましたわね・・・。

強く、迷いの無い、真っ直ぐな瞳。

最後の一撃の瞬間、視線を交わしたあの時。
あの瞬間だけは、本物でしたわ。
身体にはまだ、あの時に撃ち込まれた一撃の感触が残っています。
そして、私が撃ち込んだ攻撃の感触も・・・。

「・・・織斑、一夏」

初めて会った男・・・男だと言うのに、それでも。
私に、このセシリア・オルコットに一撃を喰らわせた男・・・。
他の男とは違う、何かを感じるのはどうしてでしょう・・・？
たかが、男の分際で。

きゅっ・・・蛇口を捻り、お湯を止める。
湯気で包まれるシャワールームの中、曇った鏡を掌で大きく擦る。
そこに映るのは、見慣れたはずの自分の顔。
・・・もつと良く、知らないといけませんわね。
織斑一夏、私と『ブルー・ティアーズ』に一撃を与えた男の、こと

を。

S i d e 織斑 一夏

セシリアとの試合の翌日、クラスに来たらとんでも無いことになっていた。

具体的に言うと、何故か俺がクラス代表になっていた。

・・・何でだよ、負けだったじゃん俺！

「では、1年1組のクラス代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりで良い感じですよね」

嬉しそうにしないでください、山田先生。

クラスの女子達は「唯一の男子なんだから、持ち上げないと」とか「経験が積めて情報も売れる、一粒で二度美味しい」とか言ってるけど・・・いやいやいや！

第一、あのセシリアが納得するわけが。

「私、代表は辞退致しましたの」

・・・って、本人が納得してるし！
それなら、まあ・・・って、そうじゃないだろ！

「おおつ、見事なノリツツコミですね、一夏さん」
「だね、実に見事だと思うよ」

「いやいや楓、のほほん（布仏本音）さんと一緒になって拍手するなよ。」

波長が似てるのか何なのか知らないが、すっかり友達になっているらしい。

箒もあれくらい社交的なら、もう少し人付き合いも上手くなるだろうに。

「一夏？」

「と、とにかく、何で俺が代表なんだよ!？」

隣にいた箒が物凄く剣呑な雰囲気放ったので、話題を戻す。

「・・・と言うか、何で俺の考えてることってバレるんだ？」

俺、わかりやすいのか・・・？

「勝負自体はああ言う結果でしたが・・・初めてのバトルで代表候補生の私とあれだけ戦ったのも。むしろ私が退かないと面目が立ちませんわ。快く代表の座を受け取ってくださいまし」

その心遣い、今は知らないから。

「・・・と言うか、セシリアの俺を見る目が観察しているような物に

見えるのは何でだ？

「ISの技術向上には場数を踏むのが一番・・・クラス代表ともなれば、バトルには事欠きませんもの」

「いや、そうかもしれないけども・・・」

「何でしたら、私が教えて差し上げても良くてよ？」

「必要無い、私が頼まれたからな、私が教える」

おお、箒さん。

いきなり話に混ざって来たかと思えば、何故か言葉に物凄い棘が。

「あら、そう。なら仕方ありませんわね・・・私は見ればそれで十分ですし」

そしてあっさりと引き下がるセシリア、最初の刺々しさはどこに行つたんだよ。

と言うか、後半に何かブツブツ言っただけか？

いや、まあ、良いけど。

「あ、ね、姉さん・・・」

その後、楓がおずおずと箒に近付いて来た。

期待と不安が混ざった表情で、ツツツと傍に寄って行くその姿は、ちよつと可愛かった。

「そ、その・・・お、おは・・・おはよう・・・」

「・・・」

「・・・えと。あ・・・」

対する箒はと言うと、ふいっと猫のように顔を背けて、自分の座席へと向かって行った。

おい、妹に対して何て態度だよ。

そして楓は楓で、落ち込んだ猫のようにしゅんとしている。

話相手を失ったセシリアも、「やれやれ」と言いたげに肩を竦めて自分の座席へ。

「うーん・・・」

「だ、大丈夫だって楓、箒もさ・・・」

「・・・グッドモーニングの方が良かったかな・・・？」

いや、そこじゃないと思うぞ。

楓は腕を組んで何やら考えながら、自分の座席に戻った。
箒の反対側、廊下側の座席に。

・・・まあ、俺は実の所、あんまり箒と楓のことは心配してない。
先週からの箒の行動を見てれば、何となくだけわかる。

入学式の日、教室と寮で・・・箒、ちゃんと楓のことを守ってたもんな。

束さんのことを聞いて来る生徒から、さ。

「・・・やれやれ」

さっきのセシリアじゃないけど、肩を竦める。
素直じゃ無いんだからな、箒は。
あ、昔からか。

「さつさと席につけ、大馬鹿者が」
「・・・ってえっ!？」

チャイムが鳴ったのに気が付かなかったから、教室に来た千冬姉に
頭をはたかれた。

・・・と、言うわけで。

俺は、1年1組のクラス代表になった。

第3話：「クラス代表決定戦・後編」（後書き）

篠ノ之 楓：

どうもです、「白式」に触れてひやつほうな楓です。

アレは今やどこの企業にも国にも所属していないので、私も触れて嬉しいです。

ま、詳しい所属はまたどっかに決まるでしょ。

それでは今回はIS整備に関する物で、「初期化」と「最適化」、それでもって「一次移行」について説明しちゃいますね。

「初期化」・・・

読んで字の如く、ISのコアを初期化する作業。全世界に配備されているISの内100〜150くらいは研究開発用で、新しいIS（コア外装）の開発に日夜研究されてるわけですが・・・そこで新しい外装にしたり、あるいは操縦者を変更したりする場合は前の外装・操縦者の記憶をコアから「初期化」しないとイケないんです。今回の場合、「白式」に一夏さんを操縦者と認めさせるための第一段階としてその作業が必要だったわけです。

「最適化」・・・

これも読んで字の如く、そのIS（特にコア）を新たな操縦者に適合させる作業。これが終わると「一次移行」と言う現象が起こってその操縦者の「専用機」になることができます。量産機・訓練機なんかは「最適化」せずに使うんで、これは特に専用機持ちの人に施される作業ですね。自動でもできますが、時間が・・・今回の場合、一夏さんが試合中に適合させた感じですね。

篠ノ之 楓：

ふう・・・では次回、セカンドが来るそうです・・・セカンド？
・・・束お姉ちゃん、勝手にドロップ缶持って行かないでね？

篠ノ之 束：

ぎくうつ！？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293z/>

インフィニット・ストラトス 黒き叡智

2011年12月16日19時20分発行